凍京NECRO PREDAWN

白鳥女学院連続誘拐事件



凍 京 NECRO PREDAWN

白鳥女学院連続誘拐事件

Character

臥龍岡早雲（ながおかそううん）



鴉済生死者追跡事務所所属の民間特別生死者追跡者。2丁のマズルスパイク付き拳銃リ・エリミネーターと、外部電脳エクスブレインを駆使し、近接銃術で戦う。冷静沈着だが感情表現が苦手で、同僚のエチカにはボンクラ呼ばわりされている。

牙野原エチカ（きばのはら）



鴉済生死者追跡事務所所属の民間特別生死者追跡者。感情的で直感を元に行動する。レズビアンで可愛い女の子に目がない。状況によって様々な武器を使い分けるのが強みだが、ラビットパンチという携帯チェーンソーを多用する。

鴉済燎子（からすずみりょうこ）



鴉済生死者追跡事務所の所長。未亡人。色気のかたまりのような女性で、気を抜くと下着姿で生活する。

コン・スー



超（Hyper）ゲットーの隅で「雪ニルヴァーナ」という店を経営するひきこもり少女。表向きはジャンクショップの店長だが、情報屋としての裏の顔を持つ。屈指のハッカー。「鴉済生死者追跡事務所」はお得意先。

【久留間咲良（くるまさら）】白鳥女学院に通う少女。

【走狗（そうく）】電気信号ドラッグの売人。

【赤目（あかめ）】南海幇の幇主。

【石榴（ざくろ）】赤目の正妻。

【狡兎（こうと）】南海幇の幹部。

【徐福（じょふく）】四竜会に仕えるネクロマンサー。

渚神妻（なぎさかずま）



軍警察治安維持局組織犯罪対策部生死者犯罪対策課所属の女性太尉。

Map



- A マラッカギャング（MALACCA GANG）
- B 軍警察（MILITARY POLICE）
- C チャイニーズ・マフィア（CHINESE MAFIA）
- D 元アメリカ軍（EX-U.S.ARMY）
- E ヤクザ（YAKUZA）
- F 超ゲットー（HYPER GHETTO）
- G ロシア政府（RUSSIA）
- H 山手線パイプライン
- I 中央線パイプライン
- J 銀座線パイプライン
- K つくばパイプライン
- L 総武線パイプライン
- M 日比谷線パイプライン

Keywords

凍京都

旧東京。現在日本で最も繁栄している都市。人口はおよそ500万人と見こまれている。2150年の第二次米中戦争激化と地球寒冷化による農地喪失時に、軍警察の少壮幹部グループの提言によって名称が「凍京」へと改変された。

ネクロマンサー

ネクロマンシーの技術を持つ人間の総称。米中戦争中に広まり、軍の特殊部隊に組み込まれ、NECROTACと呼ばれる死者を用いた戦術を普及させることになった。戦後、その多くがアンダーグラウンドへと潜り犯罪行為に手を染めたため、各国で大問題となっている。

リビングデッド

動く死体。マスターにあたるネクロマンサーの意のままに動き、マスターの指示が消えると破壊衝動のまま、周囲の人間に見境なく襲いかかる。

生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）

国・都がその技術・技能を認定したリビングデッド等の「特別生死者」を追跡及び対処を行う民間委託業者の通称。正式には民間特別生死者追跡者（プライベート・スペシャル・リビングデッド・ストーカー）。

軍警察

それまでの警察組織では対処不可能な事案を扱う目的で発足された治安組織。2150年8月発足。都市ゲリラ・テロリスト対策などの治安維持だけではなく、司法、行政に強い影響力を持つ。

ホットパイプ

凍京の地下熱源「セントラルホットゾーン」を利用した対寒冷化高圧水蒸気循環ネットワークであり、都市全体に張り巡らされた都市の血管。

ネクロマンシー

ネクロマンサーがリビングデッドを創り、操る術のこと。死体に死霊を注入し、脳と心臓を再び動かし、血液も循環させ、奴隷として意のままに扱うことができる。技術が高くなれば人間となかなか見わけのつかないリビングデッドを創り出すことも可能。

死霊（レムレース）

ネクロマンサーが死体をリビングデッドにするために注射する特殊な液体。生きている人間には効果がない。

近接銃術

NECROTACに対抗するために生まれた、近接戦闘を主眼とした格闘技。近距離の射撃で弾丸を節約しつつ、白兵戦にもスムーズに移行でき、効率よく大量の敵に対処することを想定する。

電気信号ドラッグ

電気信号を送ることで人工的に興奮状態を創り出す機械。コイン程度の電極パッドを、ワイヤレスでコネリンに繋ぎ、脳を電気信号で直接刺激する。

滲む蒸気広告（ベイパーホログラム）を浴びるようにアメホコの雑踏を進みながら、臥龍岡早雲はしかし、熱気が運ぶ臭気が歌舞伎町のそれとは全く異なることを不思議に思っていた。目を閉じていても差違がはっきりとわかる。歌舞伎町で漂うのは欲望丸出しの人間の性、アメホコで漂うのは同じ欲でも金の匂いだ。

縦横に走るホットパイプを潜り、凍京一の商業地帯アメリカ歩行者天国を南に下って右手に折れる。上野広小路交差点に林立するカラオケボックス店のうちのひとつ、「ＫＡＲＡＯＫＥ皇帝（エンペラー）」。白・青・赤・黒とめまぐるしく彩りを変えるネオンの昇龍は、臆面もなくその施設の所有者を示していた。

早雲は指輪型小型情報端末（コネリン）を唇に当て、ボスの鴉済燎子に報告する。

「到着しました」

『中に入って。五階よ』

転送されてきた電子入場パスを、一階ロビーで待ち受ける警備ロボットに示す。コネリンから投影される二点投射式ホログラムでの認証は偽装が容易で、セキュリティの面ではいささか心許ないが、清濁併せのまなければこの場所での商売は続かない。

早雲は一般人を装うため、銃を携帯していなかった。異変が起これば待機したパイプランナーが金属管の網の目を辿り、三〇秒で彼の居場所に着くはずだ。その程度なら素手でも十分保たせる自信があったし、そもそも暴力など振るわないに越したことはない。この

カラオケボックスにネクロマンサーが潜伏しているという確証はまだない。

早雲はエレベーターで五階へと上がり、すぐに指定の部屋への廊下を逸れた。「進入禁止」の扉から屋内配管のホットパイプを擦るように調理場をくぐって奥の事務所へ。

壁のパピルス(電子ペーパー)に映る一六分割の画面で、アフターファイブの老若男女が次々に入れ替わり立ち替わりする。マイクをそっちのけで食べ放題の合成肉を食い散らかす若者たち、最近流行りのSubstance-Conceptを歌い踊る合コンの男女、廉価なラブホテル代わりに乱交する中年夫婦の一団。

早雲は監視カメラのうちひとつに目をとめた。

イスから肉がはみ出す巨体におかっぱの少女は、「久留間咲良(くるまさら)」のはずだった。コネリンの動画解析プログラム(Nightmare)も、修学旅行写真の彼女と同一人物であると断じている。身振りの癖から一卵性双生児の差違も九九％以上見分けるコン・スー特製のプログラムは十分に信頼に足る。

だが、早雲の受ける印象は違った。資料でも十分に不美人と言えたその顔つきが、輪をかけて醜く感じられる。丸々と太った腕の血色は、死人のように青白い。

一方、隣に座る痩せぎすの男は、情報にあったチャイニーズ・マフィアの下っ端だ。本名は判然としないが親しい者からは走狗(そうく)という名前で呼ばれており——

「チョトお客サン!」

「頼む。いいところなんだ」
背後からやってきた男性店員に、早雲は百元札を放り投げる。
仮想環境プログラムは進化して、電気信号ドラッグとアイソレーションタンクで現実に限りなく近い——あるいは現実以上の体験を提供することが可能となった。だが一部には、今同じ現実世界で進行する乱交を見る興奮が、何物にも代えがたいと感じる人間が確かにいる。そんな異常性癖者を演じて、早雲は前屈みに画面を覗き込む。
机の上に転がる百元札を、男はすぐさま懐に入れた。
「迷惑かけナイで下サイよ」
「好的（ハオダ）」
カタコトの日本語にカタコトの中国語で応えながらも、意識はじっとパピルスの防犯映像を向いている。
頬のこけた顔に目だけをギラギラと輝かせる走狗に、咲良は躊躇いがちにその巨体を委ねる。体が震えるのは期待からか不安からか、それとも禁断症状のためだろうか。当然、彼女が白鳥女学院から五人の少女が失踪していることを知らないはずはない。「いいドラッグがある」と五人を走狗に紹介したのは、同学院に通う咲良自身だ。
走狗は金の虎が描かれた紙袋から電気信号ドラッグを取り出す。それまで戸惑い怯えがちだった咲良の様子が豹変、コイン状のパッドを奪い取ると舌を這わせて唾液に濡らし、

自らの額に貼り付ける。即座に多幸感に満ちたその瞳が、理性の光を点しているとは思えない。

やはり久留間咲良は電気信号ドラッグ漬けにされている。

だが、部屋へと乗り込むにはまだ早かった。なぜ進学校の女子生徒を立て続けに誘拐したのか、なぜ死体はリビングデッドが再殺された姿で見つかったのか、白鳥女学院連続誘拐事件の真相を暴くためには、用心深く距離を取って泳がせる必要が――

「うおおおおおおッ!!」

カメラの部屋の扉が開いて、中へと人影が飛び込んだ。予想外の展開に言葉もなかった。コネリン越しにモニタしたボスの燎子でさえ止められない。

部屋に飛び込んだのは別室で待機しているはずの相棒、牙野原エチカだ。

▼

▼

▼

「うおおおおおおおッ!!」

牙野原エチカは扉を蹴り開けると、咲良の額から電気信号ドラッグをはたき落とす。電



気刺激をぶつ切りにされて、少女の巨体がぶるんと震えた。

「ンダコラァッ!!」

走狗は足元の紙袋に手を突っ込み、トカレフを構える。ホウ素火薬の衝撃に耐えられるように改造済みだが、その外見は古き良きマフィアの伝統に則った違法拳銃だ。

銃口が自分の体を向く前に、エチカはテーブル上のグラスを投げつける。振り払う銃身、砕けるガラス、飛び散る氷水。明後日の方向へと弾丸が飛び、貫通力に秀でた七.六二ミリの弾丸が、壁の裏に配管されたホットパイプを撃ち抜く。

蒸気が噴き出し、警報装置が鳴り響いた。走狗は再び拳銃の狙いを定めようとするが、エチカの長い足がそれを蹴り飛ばす。トカレフは乾いた音を立て天井と壁を跳ね返り、噴き出す水蒸気の中へと消えた。視線で追うエチカの注意がほんの一瞬逸れた。

凍京の黒社会では、僅かな判断の遅れが致命傷を招く。

走狗の動きに迷いはなかった。生存のための最適解は全てを捨てて逃げ出すことで、扉が弾けんばかりの勢いで部屋を飛び出し、廊下を走る。

「燎子さん！」

エチカはボスの指示を仰ごうとするが、緊急起動したメッシュジャマーで通信は途切れている。店も警察沙汰はゴメンだから、厄介ごとにはこういう対処をするのが常だ。

何事かと部屋を出る他の客を押しのけて、小柄な走狗は狭い廊下を駆け抜けた。エチカ

もすぐに追いたいが、水蒸気が満たしかけているその部屋には、電気信号ドラッグで倒れたままの久留間咲良がいる——

「行け！」

「サンキュー！」

監視カメラ担当の早雲が、持ち場を離れて部屋へと駆けつけた。エチカは相棒の的確なフォローに感謝しつつ、廊下へと怒鳴りつける。

「どけどけどけーッ！　邪魔するヤツははっ倒すぞ!!」

彼女は凍京屈指の生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）、相手が生きていようが死んでいようが、追跡（ストーキング）はお手の物だ。廊下にたむろする野次馬をすり抜け、押しのけ、飛び越える。行き着いた廊下の突き当たりには走狗の姿はなく、代わりに月の切り取られた小窓がひとつ。

エチカは一瞬の躊躇もなく、夜空に向かって飛び出した。ベイパーホログラムをすり抜け五階分の落下。凹んだラーメン屋台の屋根に音もなく着地し、店主が怒声を投げる方向へと駆け出す。

夜店が立ち並ぶ路地を四つ足の獣のように駆ける走狗の体は、大量の違法改造でかなりの重量があるはずで、落下の衝撃を殺しきれなかったのはそのせいだ。対するエチカの体は天然物。最大出力こそサイボーグには劣るが、オーダーメイド・ナノ粒子薬品でビルドアップされた敏感で繊細な肉体が、彼女の最も信頼できる武器だ。

夜店の呼び声を振り解き、地上を這うホットパイプを乗り越え、燦然と輝くホログラム看板をくぐり、湿った臭気を全身に浴びながら、獲物が折れた路地へと飛び込む。

「うおっと！」

出会い頭の一撃が、エチカの髪に掠めた。

狭く人通りのない裏路地で青竜刀を持つ四人の男。見開くその瞳に血が滲んでいた。心臓が止まり凝固しかけたその色味は、赤黒（ダスキーレッド）——生死者（リビングデッド）の証だ。

「バンザーイ!!」

突然エチカが両手を掲げる。一見降伏とも思える仕草をしたその手のひらに、愛用の携帯チェーンソー、通称「ラビットパンチ」が魔法のように落下した。

落としたのは、頭上に走るホットパイプの網目を走り、エチカの居場所をトレースした六脚の機械蜘蛛——パイプランナーだ。

「ありがと燎子さんッ！」

『派手にやり過ぎないでよ』

「ガッテン承知！」

カラオケボックスのメッシュジャマー区画を抜け自由になった通信で、エチカはボスの燎子に感謝を述べた。

立ちはだかる四体のリビングデッドは防腐処理さえ施されておらず、周囲には屋台の臭

豆腐のような匂いが漏れ出ている。丹念に手をかけたＨｉ‐Ｆｉは、生きた人間と見わけをつけることが困難で、中には人間界に紛れ込んで生活が可能なものもいる。だが目の前の四体は、辛うじて筋力強化のインプラントはされているものの、Ｈｉ‐Ｆｉと呼ぶのさえおこがましい粗末なデキだ。

生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）牙野原エチカの敵ではない。

「行くぜっ!!」

どうせ殺るなら派手がいい――高速回転するラビットパンチの唸り声は、わざと大きく響くように改造を施してある。刃はウルトラハード・多結晶ダイヤモンドと超硬合金製で、振り下ろされる青竜刀ごとリビングデッドを切り裂いた。赤黒い血を吐き出して、首が呆気なく宙に舞う。

それでも感情のないリビングデッドは怯まない。遠隔地から操作するネクロマンサーの指示に忠実に従い、一糸乱れぬ連携で襲う。

エチカは笑顔を浮かべている。死体を殺すのが生きがい――それが、彼女の口癖だ。

脚を切り飛ばし、胸に突き入れ、腸をえぐり出す。切り刻み、掻き回し、粉砕する。偽装されていない死者の血は、どろりと粘性を帯びた赤と黒（ダスキーレッド）。街中で堂々披露されるスプラッタな光景に、しかし悲鳴を上げる通行人はいない。それは凍京で、日常茶飯事とは言えないまでも、幾度となく繰り返された光景だ。

四体のリビングデッドを瞬く間に調理しおえるが、当然走狗の姿は消えてしまっている。

そもそも中華料理店が山ほど軒を連ねるこの繁華街で、チャイニーズ・マフィアの一員を最後まで追跡することは困難だ。

だが、代わりの収穫はあった。

エチカはひとつも息を乱すことなく、最初に切り飛ばしたひとりの首に向き合う。これだけが唯一脳みそを傷つけられていない。

リビングデッドの動作のメカニズムは、二一九九年の科学でも解明されていない。わかるのはただひとつ、死霊(レムレース)を注入されたリビングデッドは、その脳が破壊されるまで活動を続けること。

この死人の生首は、まだ生きている。

△　△　△

臥龍岡早雲と牙野原エチカが在籍する鴉済生死者追跡事務所は、新宿二丁目のど真ん中に存在する。右隣はゲイ向けのアダルトショップ、左隣は喫茶店や銃砲店が入った雑居ビ

ル。そんないかにもいかがわしい土地にこそ、賞金稼ぎ(バウンティ・ハンター)の事務所はふさわしい。
騒動から一夜明けて、朝食後の事務所特製コーヒー「ヨアケガラス」ブレンドを飲みながら、早雲は尋ねた。
「どうして部屋に飛び込んだ?」
「うるさかったから」
「……なんだって?」
「隣の部屋の歌が音痴でさ。うるさかったんだよ」
「…………」
エチカの言い訳にもならない言い訳に、早雲はクラシック映画の台詞を思い出す。「太陽が眩しかったから」——人殺しの理由をそんな風に説明した主人公がいた気がしたが、何という作品だったか。
「気まぐれはやめてくれ。ぼくたちはチームだ。ネクロマンサーの組織犯罪に対抗するためには、チームワークで対抗しなきゃならない」
「しかし硬直した組織は過ちを再生産する」
詰め寄る早雲に、彼のボス鴉済燎子が笑顔で割り込む。
「結果オーライね。あの電気信号ドラッグ、致死量の電流が流れるように調整されてた」
「あのって、久留間咲良の?」

「ほーら、作戦通り！」

エチカはビシッと指を突きつけてみせる。口から出任せなのは火を見るよりも明らかだだが、あそこで突入を躊躇えば、咲良が死んでいたのも事実だろう。

ということはつまり——

「もう、誘拐犯は彼女に手引きしてもらう必要がなかった？」

「ミーティングを始めましょう」

早雲の問いかけを、燎子は笑顔でいなした。朝食後、「ヨアケガラス」を飲みながらのミーティングは、鴉済生死者追跡事務所の不文律。この事務所にはもうひとり計算好きの変態生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）がいるが、彼は今軍警察に乞われて大阪に出張中だ。人手が足りない時に限って厄介な案件が舞い込むのはこの仕事の常だと、早雲は苦いコーヒーを啜る。

「状況をおさらいするわね」

ホログラフに今回の事件の要点を表示しながら、燎子が解説を始めた。

「事件の発端は二週間前、白鳥女学院の女子生徒が何の前触れもなく失踪した。いいところのお嬢様だけれども身代金要求はなし。失踪した少女も品行方正で家出の動機は見当たらない。そんな事件が立て続けに五件、まるで神隠しのように、女子生徒達の行方は全く掴めなかった」

「プロの犯行だねー」

「問題は動機。攫われた五人の女子生徒に、これといった共通点は見当たらない。強いていえば久留間咲良と接点があったことくらいだけど、閉鎖的な名門女子校だから特段珍しいわけじゃないし、他にも親しかった友達はいるわ」
「なぜ彼女たちが選ばれたのか、ですね」
ホログラフに映る五人のプロフィールを観察する。写真から合成された喜怒哀楽の表情変化ループが、なんともわびしい。
「にしても、みんなブサイクだね」
「……そうかな」
白鳥女学院はこの凍京でも珍しい女子専門の進学校だ。誘拐された五人は、この街の一般的な女性に比べて、自分を飾る意識に乏しいようには思えるが――
「ブサイクだよ。本気で人を好きになったことがない証拠」
エチカは断言する。直感こそ彼女を動かす行動原理で、事務所がそれに助けられたことは数え切れない。実際、重要な証言者である久留間咲良の命が助かったのも、彼女のカンのおかげだった。
燎子は状況の確認を続ける。
「旧お台場エリアのリサイクル施設で五人目の死体の一部が見つかったのが昨日の一六時。体の九九％は、死後に生体分解バクテリアで分解されており、残ったのは彼女の左腕義手

とそれに微かに付着した死亡後の細胞片のみだった。軍警察は解析の結果、死体に死霊（レムレース）が注入されていたことを確認、ネクロマンサーの関与を認定。ゴミ収集車と凍京総合治安維持システム『浄天眼』のデータベースから、チャイニーズ・マフィア南海幇（なんかいほう）の一員、本名不明通称走狗の関与が疑われ、直後に白鳥女学院の生徒久留間咲良との関係も浮上、ふたりが三日に一度上野のカラオケボックスで落ち合っていることも確認された、と」

「ぼくたちに連絡が来たのが一七時、一通りの手はずを整え、一七時三五分に突入。突発的に戦闘が発生し、ぼくは久留間咲良の身柄を保護。エチカは走狗を追走したが、小路で待ち受けていたリビングデッドに襲撃を受け、姿を見失う」

「おかげで、ネクロマンサーの関与は確実になった。――燎子さん、これからの方針は？　南海幇に殴り込む？」

「今はまだネクロマンサーと南海幇の繋がりが立証できていないわ。飛び込んでも返り討ちにあうだけよ」

　やる気満々のエチカを、燎子は笑顔で宥める。

「なぜ少女を攫いネクロマンシーを施したのか、なぜ協力者の久留間咲良を殺そうとしたのか、まずは地固めから始めましょう。――早雲クン」

「はい」

「コン・スーちゃんのところに行ってちょうだい。死霊解析の結果が出ているはずよ」

まともに話を引き出すことができるのだろうか?

「了解しました」
「エチカちゃんは――」
「はいはい、カズマのトコね」
苦々しげな笑みを浮かべる同僚を、早雲は少し不安に思う。果たして彼女が、あの少女から

▼
▼
▼

光アイソレータ越しに見る取調室の咲良は、椅子の上に収まりきらない巨体を縮こまらせて、小刻みに震えている。初めて放り込まれる軍警察の取調室は、箱入りのお嬢様を怯えさせるのに十分だろう。
「……ブサイク」
「ん?」
ぽつりとしたエチカの呟きを捕らえきれず、傍らのカズマが聞き返した。尋問を担当する渚神妻大尉は古くからの知り合いで、「渚大尉」よりむしろ「カズマ」という呼び名がし

つくりくる。
「今なんて？」
「別に。で、咲良ちゃん、何かゲロった？」
「まだ様子見の時間だ」
「手こずってんじゃないの？」
「相手は下の毛も生えてないようなガキンチョだぞ」
「見た？」
「見るか！」
　真っ赤になって否定するあたり、相変わらずいじりがいがある。軍警察を背にしたカズマの方が立場は上だが、プライベートではふたりの関係が逆転する。権威を笠に着たタイプほど倒錯したプレイに興奮を覚えるもので、彼女は今まで何度も取調室で軍警察の制服を脱いでいた。
「あたし、ちょっと咲良ちゃんに聞いてみるわ」
「五分だぞ。やり過ぎんなよ」
　カズマの指定に手を上げ、エチカは扉を開ける。
　殺風景な取調室は不気味なほど静まり返っていて、ノブが回るだけで咲良の巨体がびくりと跳ねた。

「ハーイ、あたしを覚えてる？」
扉の傍らで尋ねて待つが、言葉は虚空に消えて返答がない。咲良は俯いたまま、目を合わせようともしなかった。部屋の温度はやや涼しめに設定されているが、咲良の巨体は汗まみれで、彼女がひどい重圧に晒されていることを明白に物語る。
しばらく無言で焦らしてから、向かいの席へと歩き出す。イスに腰掛けると、切りそろえられたおかっぱの向こう、俯いたままの咲良の瞳が蠢いて逸れた。
「聞いたでしょ？　あたしがカラオケボックスに突入しなかったら、貴方は致死量の電気信号を喰らって死んでた」
「…………」
「恩人だからさ、話くらいさせてよ」
「…………」
「それとも、余計なことしやがって、とか思った？」
「…………」
返答はない。
エチカはコネリンから、久留間咲良のパーソナルデータを呼び出して、わざと彼女からも見えるように表示する。ホログラムを上から下までゆっくりスクロール。だが彼女は恐怖から逃れるように体を縮こまらせたまま、頑なに視線を俯けている。

そうしたところで、恐怖が消えてくれるわけじゃないのに。
「勉強はできるみたいね。将来の夢は弁護士――いいじゃない」
「…………」
「それで今の学校に入ったんでしょ？」
「…………」
「一握りのエリートが、こんなことで人生棒に振るなんてね」
「…………」
「アンタさ。自分が悪いことしたって自覚、ある？」
「…………」
「電気信号ドラッグが欲しくて、友達を紹介したんでしょ？」
「…………」
「アンタは、友達を、売ったんだ」
「…………」
「アンタが、彼女たちを、殺したんだ」
「死ねば良かった」
肉の狭間で圧迫する呼吸器から、か細く甲高い声が辛うじて漏れる。
「ねえ、今なんて――？」

「私なんて、死ねば良かった」
頭にきて考えるよりも先に体が動いて、エチカは咲良の巨体の胸元を鷲掴みに引っぱると反転して机に叩き付けた。仰向けに見上げる彼女の耳元に、懐から取り出した携帯チェーンソーを突き立てる。
「ひっ」
ウルトラハード・多結晶ダイヤモンドの刃が唸りをあげ、机との摩擦で火花が散る。回転はジリジリと速度を上げ天板を削り、顎との境目の見えない首に迫る。咲良の巨体が恐怖に痙攣する。
「今なんつった⁉」
「ひ、ひ、ひ………」
「死にたいなら、今ここであたしが殺してやるよ‼」
「バカやめろッ‼」
カズマが飛び込む。制止する彼女の怒声は本気で、その時エチカは初めて、脅しではなく咲良を殺したがっていた自分に気付く。
「ちっ」
「はひ、ひ、ひ……」
チェーンソーのエンジンが止まるが、机の上で死の恐怖に食らい付かれた咲良は、余韻

で身動きを取ることができない。エチカは追い打ちするように、耳元で囁いた。
「今度ふざけたこと言ったら、本気で殺す」
「ぁ……ぁぁあああ……あ……」
「いい加減にしろ！」
カズマに追い立てられ、エチカは早足で部屋を出た。
「今度やったら出禁だぞ！」
「ああ」
おざなりに返答しながら、しかし彼女に襲いかかった衝動は、すぐには収まりそうになかった。
——どうして自分は、こんなにも苛ついているんだろう？

△　△　△

大通りを吹きすさぶ吹雪を浴びながら、早雲は事務所の圧縮空気車（シーラカンス）を下りた。かつて東洋一の電気街と呼ばれたその街は、浅草再整備計画で熱量を東部に奪われ、今では一部の

物好きだけが住民として残る「超ゲットー（Hyper）」と呼ばれている。各勢力の緩衝地帯として意図的に権力の空白が設けられたその地域で、余所者への風当たりは格段に強い。わざわざこんな危険地帯にやってくるのは、組織を追われ行き場をなくしたチンピラか、違法の改造パーツを求めてやってくるサイボーグくらいのものだろう。

そんな数少ない例外の臥龍岡早雲が向かうのは、旧山手線のガード下にひっそりと存在する会員制のパーツショップ「雪ニルヴァーナ」だ。正面に看板はなく、対戦車砲の直撃でさえ余裕で耐えるという分厚い扉にコネリンを掲げて認証、二重三重のチェックを通って階段を上がる。

扉を開けて店に入れば、そこは別世界だ。超ゲットーとは思えない熱気が、鼻を突く臭いと共に襲いかかる。壁一杯に並ぶのは、砂嵐を映し続ける年代物のブラウン管モニタだ。乱雑に積まれた骨董品のＡＶ機器をケーブルと変換コードが繋ぎ、そこはさながらアンティーク・サイバー・ジャングルといった趣だった。

「――――」

そんな凍京でも特異な光景の中心には、小型冷蔵庫の上に腰掛けて巨大なモニタを見つめる、眼帯の女性の姿があった。高速で流れる情報を一心不乱に追いかけて、早雲の入店には一切気付いていない。唇からは涎が垂れっぱなしで、足元には小さな水溜まりさえできていた。

彼女は雪ニルヴァーナの店長、コン・スーだ。表向きはマニア向けの年代物パーツの売買、サイボーグ・メンテナンスなどを請け負っているこの店だが、それはあくまで店長の趣味のようなもの。本業は生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）のサポートで、ひとりでこの店の経営を支える彼女は、凍京でも屈指と言われるハッカーだった。

だから目にも止まらぬ速度でモニタを流れる情報を追うコン・スーに、早雲は声をかけることができない。垂れ続ける涎を拭うことさえできないのだ。彼女は今、自分の生きる糧を得るために、電子の戦場を命懸けで駆けている。集中力の喪失が致命的なミスを招くことを、早雲はよく知っていた。甲高く唸るブラウン管の高周波を聞きながら、彼女の仕事が一区切りつくのを辛抱強く待つ。心を無にして機械のように過ごすのは、決して嫌いではない。むしろ自分には向いているとさえ思う。

「――あ。そ、そ、早雲」

「やあ、コン・スー」

「いつの間に?」

「七分前くらいかな」

一番長い時は三〇分かかったこともあるから、今回は待ったうちに入らない。コン・スーは口元をタオルで拭うと、いつものように微妙に視線を逸らしたまま、どもり気味に語り出した。

「よ、よ、用事は、死霊解析？」
早雲は頷く。昨日エチカが倒した四体のリビングデッドのうち一体は、再殺せずに頭の部分だけを切り飛ばし、コン・スーに預けてあった。ネクロマンシーを受けた死体は人間の生理とは全くメカニズムが異なるため、その脳が破壊されるまで動きを止めることはない。
ネクロマンシーはただの物理的な医療行為とは異なり、施術者の内面が大きく影響するとされている。一説には芸術的素養がなければリビングデッドの素である「死霊（レムレース）」を製作することが不可能であるとさえ言われており、製作過程はある種の職人芸に近い。実際、ネクロマンサー志望者は師匠の下で修行をするのが一般的だ。
その結果、リビングデッドの脳には作り手の「個性」が刻み込まれる。まるで絵画鑑定士がするように、制作物からにじみ出すその癖を解析し、作り手の素性を探る——それが「死霊解析」と呼ばれる作業で、コン・スーはその道の専門家だった。
「首尾は？」
「上々」
机に林立する栄養ドリンク（クレイジードラゴン）の空き缶の間から、無造作に転がったホログラフィックメモリが取り出される。ドライブに乗せると、透明な正六面体は虹色の輝きを放ちながら高速回転、内部に記録した大容量の情報を、レトロなブラウン管モニタに映し出した。死霊解

析で可視化させた、リビングデッドの脳活動だ。
「い、一見、典型的な、中国系のネクロマンサーの系統」
　ネクロマンシーを中軸とする戦術NECROTACは、二一七六年に米中戦争で初めて採用された。当事者である米国・中国は、当然リビングデッド研究で先行しているというのが一般の認識だ。
「でもよく見ると、な、内部に大きなアレンジがしてある」
「アレンジ？」
「そう、ここ……」
　コン・スーが三次元で行き交う複雑な光の運動を拡大するが、早雲はその差違を見分けることができない。ただなんとなく、流れが乱れているように感じられるだけだ。
「す、すこし……オカルティック」
「オカルティック？」
「正規の、人民解放軍とは、け、毛色が違う……もっと、み、民間信仰と交わった感じ……」
　ネクロマンシーが誕生したことで、生と死の境界は大きく揺れた。従来の科学では説明できないその現象で、一時は存在感が薄れかけていた「宗教」に再び脚光が当たりつつある。ネクロマンサーを新たな聖者と崇める「自殺志願者たち（suicide wannabes）」はその筆頭だが、その他に

も各国で土着の信仰が息を吹き返しつつあるのが現状だ。

「データベースで、共通点のある、ね、ネクロマンサーを、洗い出した……い、一番、可能性が高いのが、か、彼……」

　画面に映る禿頭の老人は、中国山東省出身の男性、本名不詳、通称「徐福（じょふく）」。元人民解放軍所属で、米中戦争では対リビングデッド戦の最前線で戦った。戦後すぐに姿をくらまし、上海で新興宗教を立ち上げると、一時は千人規模の信者を抱えたが、今から六年前に蛇尾（じゃび）の手助けで密航に成功、凍京に潜り込んだと言われている。

　地熱は世界的にも貴重だ。ホットパイプで適度な温かさを保つことのできる凍京は、急激に寒冷化の進む世界の中でも、密航者が格段に多い都市と言える。渋谷近辺を仕切るチャイニーズ・マフィア連合「四竜会」のひとつ蛇尾にとって、密航協力時に支払われる手数料は、最も重要な資金源だった。

「じゃあ、金目当ての犯行か？」

「蛇尾への密航費清算は、ずいぶん前に、お、終わったみたい。今は南海幇で、世話になってるって、う、うわさ」

　米中戦争が終わり、アンダーグラウンドへと潜ったネクロマンサーの大半は、リビングデッドを用いて用心棒まがいの仕事をしている。契約が済めば、組織から組織へと渡り歩くことも少なくはない。

南海幇は蛇尾と同じ四竜会のひとつで、主に台湾系のマフィアを取り纏めている。違法な電気信号ドラッグの売買を主なシノギとしており、走狗も南海幇の一員だったはずだ。

「どうやら、その線を探るのが良さそうだね」

「き、気をつけて。最近、南海幇がキナくさい」

コン・スーは重度のひきこもりで、提供される情報がネットワーク上のものに限られるという難点はあるものの、その確度は非常に高い。

「何かトラブルでも？」

「ぼ、ぼ、ボスの『赤目』の体調が、お、思わしくない、みたい」

「跡目争いか」

早雲は呟くが、果たしてそれが今回の事件と何の繋がりを持つのか、彼の鈍いカンは何も語ろうとしなかった。

▼ ▼ ▼

「エチカ」

扉への軽いノックに、エチカはすぐさま車のウィンドウを開けた。
「おせえええええええええぞ!!」
「まだ交代五分前だ」
「そんなの知るかーあたしが遅えっつったら時計も慌てて五分先に進むのがうわーうまそう」
「差し入れ」
早雲が突き出した紙袋は、エチカ行きつけの屋台「ジャール・プチーツァ」のピロシキだ。
「何？　わざわざ丸ノ内から!?　気ぃ利くジャン！」
「いいから中に入れてくれ」
「あ、ワリ」
エチカはすぐに車の扉を開けると、早雲を乗せるべく隣の座席に移動した。ピロシキの湯気が公共タクシー（コールドキャブ）の車内いっぱいに広がって、エチカはいてもたってもいられずかぶりつく。カリッとした生地の中から、うま味の詰まったソーセージとゆで卵が口いっぱいに広がった。
「うめぇ！　うめぇ！　神か！」
「ぼくももらうよ」

「リンゴはあたし！」
「わかってる。ほら」
「サンキュー！」
差し入れは張り込み中で唯一の娯楽で、牙野原エチカの欲望にブレーキは利かない。瞬く間にリンゴのピロシキまで平らげて、あとに残ったのは虚無だった。
「早雲」
「これはぼくのだ」
「ケチ」
エチカがダッシュボードに脚を投げ出すと、下水から沸き立つ蒸気の先に「石榴大飯店」の赤いネオンが滲み、見飽きた光景に思わず顔が歪んだ。
机に泣き崩れた久留間咲良は黙りっぱなしで結局解放、死霊解析で名前が浮かび上がったネクロマンサー徐福の行方も判然としないまま、ここで張り込みを開始してすでに四日間が経過している。
「あんまりカリカリするな」
「わーってるわーってる」
相棒の臥龍岡早雲は大変なボンクラで、事務所ではボンクラボーイズ一号の名をほしいままにしているほどだ。その彼が率先して差し入れを行うくらいだから、よっぽどイライ

ラして見えるのだろう。
近くの娼婦とのピロートークで偶然耳にした、走狗によく似たチャイニーズ・マフィアの噂を追いかけ、エチカと早雲は石榴大飯店で張り込みを行っている。毎週火曜にこの店へと姿を現しているという話だが、ラオス人だかベトナム人だか尋ねるたびに国籍が変わるその娼婦の言葉が、本当に信用に足るものなのかは自信がない。要するにこの張り込みもたぶん徒労で、でもそんな情報にさえ頼らなければならないのが鴉済生死者追跡事務所の現状だった。
うんざりする。
もし今乗っている車が事務所のシーラカンスだったなら、エチカは今すぐ自ら首都高を飛ばしただろうが、張り込み用の公共タクシー(コールドキャブ)にハンドルは備え付けられていない。
その苛立ちを知ってか知らずか、珍しく早雲が雑談を始める。
「店の名前の由来を知ってるか?」
「しらねー」
「四竜会のボスともなれば、愛人のひとりやふたり当然持っててておかしくない。だが、南海幇のボス赤目は愛妻家で知られてる」
「美人?」
「一般的にはそう判定されると思う。彼女の名前が『石榴』だ」

「へー」
　相づちをうつ頭にフッと浮かぶ一言。
「ってことはこの店は、愛の結実か」
「………？」
「上手いこと言ったんだよ！　わかれよ！」
　八つ当たりのように怒鳴りながらも、ひとりでいるよりは気が紛れる。それがせめてもの救いだ。
「石榴、ざくろ、ザクロねえ……なあ早雲、食ったことある？」
「ない」
「どんな味すんだろな」
「また食べ物の話か」
「うっせーな」
　エチカはマルチフリックで検索を開始、即座に眼前の高機能メガネ（ホログラス）に「石榴」の検索結果が表示される。戦闘時は頭上の小型外部電脳エクスブレインと連携してサジェストを提示するそのメガネだが、彼女は滅多に使いたがらない。その主な用途は指輪型小型情報端末（コネリン）の検索結果と、戦闘時の屍肉除けだ。
　意外な検索結果が出る。

「なー、早雲？　知ってっか？」
「何が？」
「いや、石榴の味だけどさ」
「ぼくは食べたことない」
「だよなー。で、ネットで調べたんだけど、ものの話によると石榴は――」
「シッ！」
早雲が鋭い視線でダッシュボードの向こうを睨む。見飽きた「石榴大飯店」のネオンの下、店内から黒いスーツの一団が現れ、颯爽と自家用車への列を形成しはじめた。
迎えられるように現れたのは、一際大きな老爺のシルエットだ。通風口から噴き出した蒸気が黒のロングコートに渦を巻き、それは彼の巨体から噴き出す気を可視化したかのようだ。目深に被った中折れ帽の影でその表情は窺えないが、唯一街灯に反射するその瞳が、闇に紅の光を引いている。
赤目――渋谷を仕切る四竜会のうちのひとつ、南海幇の幇主。
「なあ、早雲」
「やめろ」
「まだなにも言ってない」
言いながら、エチカは車のドアを開けて外へと出ている。言葉よりも行動が先。早雲が

慌てて燎子に連絡を取るだろうが、もしここが戦場なら優先すべきは現場の判断だ。漂う蒸気と八角の匂いを全身に浴びて道を横切りながら、エチカは面倒なのでここを戦場にする。

「赤目！」

一言で辺りの空気がピンと張り詰めるその瞬間、エチカの肌をブルブルと震えが走る。この感じがエチカは好きだ。それこそ、美女とのセックスに匹敵するくらい。

赤目を庇うように、スーツの男たちがエチカを取り囲み陣を構える。総勢八名。手にはそれぞれ短刀やら三節棍やらトンファーやらが握られているが、銃火器を手にする者はいない。ホットパイプが四方に走る凍京で、パイプに傷をつける危険性の高い飛び道具の使用は常にリスクを伴う。だが中国四千年の武術を背に負う黒社会にとって、それはむしろ凍京を生き抜く地の利だ。

「あの、ちょっと聞きたいことがあるだけなんだけど――おっと」

喋りながら傾いだ首を、飛来する匕首（あいくち）が掠めた。風切りの感触を肌で感じながら、牙野原エチカはニヤリと笑う。望み通りの展開になりそうだ。

「据え膳食わぬはナントヤラってな！」

振り下ろされる刃の束に、ラビットパンチが唸りを上げて噛みついた。ぐるりと体を回して一蹴、円を描いて火花が散る。さすがは中国四千年、その一太刀でこちらの力量を見

抜いたか、急激に距離を詰めることはせず一定の距離で陣を組む。四方八方から向けられる殺気。赤目の身辺警護は南海幇名うての達人たちで、その所作はそこらのチンピラとは明らかに違う。右へ一歩、左へ一歩、それに合わせてマスゲームのように一糸乱れず動く有象無象を、しゃらくせえやとエチカは笑った。

蒸気を巻いて無造作に前進すると、合わせて陣が後退するが、その先に構えるのは赤目その人だ。陣に僅かに走る緊張の糸を、エチカが投げるラビットパンチが寸断した。出し抜けに放られた武器を三節棍の男が慌てて弾き、徒手空拳となったエチカの窮地を敏に察知したトンファーが背後から振り下ろされる。一糸乱れぬ連携が崩れ、各々が各々の判断で活動を開始する。

各個撃破は戦いの醍醐味だ。

エチカは後ろも見ずに半歩下がり、握りを支点に叩き付けられたトンファーの根本近くを自ら掴む。琉球のトンファーだろうが軍警察採用のトンファーバトンだろうが中国武術の拐（かい）だろうが、武器としての基本的な思想は同じ。生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）牙野原エチカを担当する軍警察隊員渚神妻はトンファーバトンの遣い手で、経験上そのあしらい方は十分に心得ていた。

流れるような動きでトンファーの先端を下から突き上げ、てこの原理で右手の握りから奪い取る。慌てて打ちつけるもう片方、左腕のトンファーを、奪ったばかりの得物で迎え

撃ち、体勢が整わないうちに肘打ち。吹き飛ばされ倒れる男の指を踏みつぶすと、鈍い指先の折れた感触と共に、得物がアスファルトに転がった。

エチカは転がる敵の武器を悠然と拾い上げ、両手に構える。

次は双刀を構える敵がふたり、左右から息の合った攻撃で、計四つの刃が襲いかかる。双子かと思えるほど背格好もよく似ていて、それぞれの動きはまるで鏡に映したかのようだ。エチカは左右のトンファーでそれを迎え撃つ。幸いだったのは最初に奪ったその武器が、刃物への対応力に優れていたことだろう。腕を庇うように持ち替えて、エチカは二方向から雨霰と襲いかかる刃を弾く。

「チィッ！」

弾ききれない。防弾コートを左の刃が掠めた。反応が少しでも遅れていたら、腕を深く刃が抉り、あっという間に形勢は傾いていただろう。人体は無意識に左右で鏡合わせの動作をしてしまう。だが双子の攻撃は、エチカの体を中心に鏡合わせで襲うように見えて、ほんの僅か対称性が崩れていた。

「小賢しいってのッ！」

エチカは右手のトンファーを左の男に投げつけ、同時に左手のトンファーで左の男に殴りかかった。ガラ空きの右から敵が襲いかかる前に、左のヤツと決着をつける。

武器を投げつけるとは思わなかったのだろう、たじろぐ左にトンファーの鋭い一撃。衝

撃で手を離れくるくると宙を舞う刀を左手でキャッチし、握ったばかりの柄をみぞおち深くに叩き込むとすらりと反転。

——右のノロマが怯えてやがる。

エチカは不敵な笑みと共に襲いかかる。双刀で防御態勢を整える敵に対し、こっちの武器は刀とトンファー。左右から襲う非対称の攻撃は、敵の防御を混乱させる。とどめに頭突きをカマしてやると、両手の刀は乾いた音と共に地面に転がる、と同時に背後から殺気。

咄嗟にトンファーで防御するが、電気が走ったような衝撃と共に弾き飛ばされる。振り回されるのは三節棍。遠心力を生かして打ちつけるその先端の破壊力は、まともに受け止めようとすれば厄介だ。

エチカは腕の痺れを怒りで無視、転がる刀を拾い双刀の構えをとる。一方敵は、右に左に三節棍を唸らせながら、隙なくこちらの様子を窺っている。風を切り裂く先端は、変幻自在の動きとそのリーチでエチカの体を寄せ付けない。彼女が手にした双刀は近づけばその手数がものを言うが、しかし距離が圧倒的に遠い。

——さあどうする？

舌舐めずりして、エチカはまたしても、武器を放った。ただし今回は敵へと投げつけるのではなく、山なりにネオン輝く夜の空へ。

自ら武器を投げ捨てて敵の注意を逸らすのは、ストリートファイトの常道だ。三節棍の

達人も無論それを弁えていて、だから狙ったのは急激に接近しつつあるエチカの体だった。
それこそエチカの仕掛けた罠。
胴を強かに打つはずのその三節棍が、エチカのコートを捉え、絡みつき、しかし彼女の体はすでにそこには存在しなかった。エチカは防弾コートを脱ぎ捨て身軽になると、囮の上着を三節棍に絡みつかせ、その自由を奪ったのだ。先端に巻き付いた服は容易に離れず振り回す先端は一気に減速、そこへ山なりに投げた双刀が落下しエチカの手に収まった。
彼女の距離だ。
鴉済生死者追跡事務所所属の面々は、近接銃術と呼ばれる格闘技を使う。元は自衛陸軍が生み出した、対リビングデッド戦闘に特化した戦闘術。外部電脳エクスブレインを最大限に活用し、弾薬使用の効率を最大にまで高めながら、マズルスパイク付き拳銃リ・エリミネーターで戦う――それが、基本的なコンセプトだ。
鴉済生死者追跡事務所の初代所長鴉済五勝は、かつて近接銃術教導隊の一員として、死者の戦いと呼ばれたマレーシアでの戦闘に従事した。彼の薫陶を受けて育ったエチカや早雲が近接銃術を用いるのも、自然な流れだった。
もっともエチカの戦い方は、王道を行く臥龍岡早雲とは正反対だ。外部電脳エクスブレインよりも自分のカンを信じ、弾薬を思いっきり無駄遣いしながら、自分が今一番使いたい武器で戦う――彼女の戦い方は、言わば邪道。抜群の格闘センスを生かし、その場その

場に最適な武器で敵を叩き潰すその戦いを、彼女は心から愛していたし、それこそが彼女の生きる証だった。

拾った匕首で最後のひとりを気絶させ、エチカは最初に放り投げたラビットパンチを拾い上げる。四十八秒で八人の護衛は全滅、残るのは背後に控える数人の取り巻きと、俯き加減に身じろぎもしない赤目のみだ。巨躯から漂う幇主の雰囲気は、決して死を目前にした老人のものとは思えない。

彼がその恵まれた体と物理的な暴力で、南海幇のトップに収まったことを、エチカはもちろん知っている。だが、彼女の辞書に「恐れ」の文字はない。ゴキゲンにラビットパンチを唸らせて、その先端を突きつける――

寸前、火花が舞った。

ラビットパンチの刃を防いだのは突如現れた銀の半円。瞬き一つで畳まれたかと思うと火花もかき消えぬ刹那にエチカの手を強かに叩く。

「――」

携帯チェーンソーが落下したその時には、叩いた鉄の扇は再び開き、優雅に乱入者の唇を覆っている。刺すような視線で見下す紅いチャイナドレスの麗人――赤目のもっとも近くに控えていた彼女が、大飯店を捧げられたという愛妻「石榴」だ。

エチカは食べ頃に熟成したその肉体美をもう少し拝んでいたかったが、それを塞いで石

榴大飯店の用心棒たちが駆けつける。その数はおよそ三〇、手に手に長物を持っていて、素手でまともにやり合うのは骨が折れる。というか、多分無理だろう。部下に行く手を守られながら、悠然と自家用車に乗りこむ赤目の気配を、エチカはただ見送るしかない。石榴もその後、唇を隠してもわかる笑顔を湛えて車へと乗り込んだ。

「おい」

代わりに怒鳴りつけたのは甲高い音だった。背を丸めて進み出た声の主は子供のように小柄だが、義眼の端に零れる深い皺が、彼が黒社会で刻んだ年輪と絶望を窺わせた。

「どこのどいつだ？　目的を言え」

「いや、だから話があってさ」

「で、これか？」

「そっちのサービスだろ？　次から次に手を変え品を変え、満漢全席堪能させてもらったよ」

「ストーカー風情が」

非合法のネクロマンサーを抱えるマフィアとネクロマンサーを追いかける生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）は、常に敵対関係にある。まして鴉済生死者追跡事務所の面々はこの業界でも屈指のやり手、少し調べれば当然彼女の身柄はバレるだろう。

「俺は寛容だから、一応聞いておいてやる。話ってのは、なんだ？」

「お前んとこの下っ端に、『走狗』ってヤツがいんだろ？」
「知らねぇな」
それまで余裕綽々だった男の声から突然感情が消え、両目の義眼が冷たく光った。
「おいお前ら、やれ」
取り囲む三〇のチンピラが、一斉ににじり寄る。さっきの八人は武術の達人で、だから当然戦いに駆け引きがあったが、ケンカの素人にはそれがない。ひとつひとつの攻撃への対応を瞬時に判断しなければならず、それを三〇人相手に続けるには骨が折れる。実際、腕の一本や二本折られても不思議じゃない。
——使うか？
エチカが自分の頭上に控える外部電脳の存在を意識し始めたその瞬間、視界が暗くなる。
理由は頭上に輝く蒸気広告（ベイパーホログラム）を遮り巨体が落下しつつあるからで、
「あー!!」
エチカは一応頭上を指さし周囲に警戒を促した。
悲鳴、怒声——落下地点から皆が這々の体で逃げ出した直後、衝撃が鳴り響き振動と飛散した瓦礫で石榴大飯店のガラスが割れる。頭上から飛び降りた八本脚の自立型ロボットパイプランナー、識別番号ＭＦ－三九九は、軍警察にハッキングしてコン・スーと鴉済生死者追跡事務所が勝手に利用している一台で、その背にはリ・エリミネーターを握る早雲の

姿がある。

「おせえええええええぞ!!」

「今度は差し入れ無しだ」

どさくさに紛れてラビットパンチを拾ったエチカは、すぐさまボンクラの隣に飛び乗った。状況を察知した下っ端たちが慌てて飛びつくが時すでに遅し。その場でぐるりと回転して追い縋る黒服を払うと、手近なパイプに飛びついた。八本脚の先端に備え付けられた電磁石車輪が高速回転しエチカたちはみるみるうちに上昇、忌々しい石榴大飯店のネオンが紅い蒸気に霞んで消える。最高時速八〇キロを誇るパイプランナーの垂直移動を追いかけられる人間はいない。

「脱出成功!」

「揉め事起こして喜んでる場合か。後で燎子さんに怒られるぞ」

「まーまー、一応成果はあったわけだしさ」

「成果?」

△

△

△

「本名不詳、通称狡兎（こうと）。性別は男、年齢四三歳。南海幇幹部中、組織きっての知性派として知られており、次期幇主候補のひとりとも言われる」

ヨアケガラスを飲みながらのいつものミーティングで、エチカは得意げにホログラムを投射した。映るのは、両目に義眼をはめた小柄な男——もし早雲の助けが間一髪で間に合わなければ、エチカは彼らにやられていたはずだ。

「あたしは『おまえの所に走狗ってやつはいないか?』って訊いたんだ。そうしたらコイツ、なんて答えたと思う?」

とっておきの秘密を打ち明けるように、エチカは告げる。

「アイツ、走狗を知らないって即答しやがった」

「常識的に考えろ」

早雲は呆れた。

「もし知ってたとしても、正直に答えるわけないだろ」

「常識的に考えろ」

エチカは呆れ返す。

「次期南海幇の幇主候補のひとりが、組織の下っ端の下っ端の名前まで、全てをはっきり覚えてるわけあるか?　なのになんでアイツは、知らないって即答できた?」

「……………」

感心する早雲に、エチカはここぞとばかりたたみかけた。

「あの狡兎とかいう野郎は、走狗の存在を否定しなければならない、強い動機を持っている」

「それで？」

「え？」

「だから、それで？」

「それで……と、申しますと？」

会話に割り込んだのは、それまでニコニコ笑顔でエチカの発表を聞いていた事務所のボス、鴉済燎子だった。顔は優しいが、声が笑っていない。

「それで、私たちはどうすればいいのかしら？」

「あのすいません、燎子さん怒ってる？」

「怒ってないわよ。で、どうすればいいのかしら？」

「あの、怒ってる？」

「怒ってないわよ。どうすればいいのかしら？」

「怒ってる、よね？」

「どうすればいいのかしら？」

「あ……ええと、その……」

事務所の現所長、鵐済燎子は笑顔で怒るので怖い。だから言ったんだ——溜息交じりに、早雲は助け船を出す。

「すいません、燎子さん。ぼくが側についていながら——」

「早雲クンは黙っててもらえるかな?」

「すいません」

助け船はすぐに逃げる。エチカの瞳が「薄情者!」と叫ぶが、あの燎子の視線を正面から受け止められるほど、早雲のメンタルは強くない。

いずれにせよ、燎子の言っていることは正論だった。この事件を解く手掛かりをほとんど見つけられていないのに、自分たちが走狗を追いかけている事実が知られれば、相手のガードは更に固くなる。怪しいという確証を得られた程度では、埋め合わせにはならない。

現に南海犇犇主赤目は、まるで揉め事を避けるように伊豆の別荘まで移動し、今頃は愛人石榴とプライベートな休日を過ごしているということだった。絶え間ない嵐で陸路は塞がれているし、凍京湾外の海路も流氷で移動がままならないから、都市間の移動はほぼ空路に限られている。資源が限られた現在、私用でバルチャーを飛ばせるのはステイタスの証だ。当然、早雲たちにはおいそれと後を追いかけることができない。

つまりは、完全な手詰まりだ。

「……ごめんなさい」
「よろしい」
蚊が鳴くように告げるエチカに、燎子は今度こそ微笑みかけた。
「硬直した組織は過ちを再生産する。しかし、逆もまた然り。弛緩しきった組織もまた、過ちの温床よ。次からは気をつけてね」
「反省してます」
緩めるところは緩めるし、締めるところはキュッと締める。鴉済燎子の信賞必罰は公正で、だからこそ事務所の面々からの信頼は厚かった。
「もっとも、こうなったのは私の責任でもあるの」
「燎子さん、それは違います。ぼくがもう少し――」
「違わないわ。現場の不安を取り除けないバックオフィスは失格だもの。なぜ走狗は白鳥女学院の生徒を狙ったのか、徐福との関係は何か、南海幇の現状にどんな影響があるのか、それを調べるのが私の仕事――あ、ごめんなさい」
燎子は唐突に会話を打ちきって、マルチフリックで受話器を作る。会話の相手は渚神妻大尉。
「――――」
思わず、早雲は顔をしかめる。彼女は鴉済生死者追跡事務所を担当しており、軍警察と

その他大勢の市民に上下関係を叩き込むのが生きがいだ。言葉だけでなく容赦のない暴力を振るう渚大尉を、早雲は苦手にしている。今回のいざこざは、未だリビングデッドが関係しているという確固とした証拠がなく、締め上げられるのは必定だった。自分が呼び出しを喰らうのは勘弁願いたい――

「本当ですか!?」

早雲の祈りに燎子の叫びが覆い被さった。

「は、はい――はい、はい――わ、わかりました。今すぐ向かわせます」

「燎子さん、どうしたんですか?」

「朗報よ」

マルチフリックで会話を終えた鴉済燎子は、朗報を受けたのとはほど遠い、用心深げな眼差しで告げた。

「走狗が捕まったわ」

▼ ▼ ▼

光アイソレータ越しに見る取調室の走狗は、あの夜カラオケで見た時と同じ痩せぎすの体に、新たなあざや傷を大量に作っていた。軍警察はいつもの仕事をしたということだろう。

意外だったのはそのいつもの仕事程度で、走狗があっさり徐福の居場所を明かしたことだった。

「クセぇな」

「あ？　お前、軍警察の仕事を疑うのか⁉」

「お前だって納得いかねーから、わざわざあたしたちに知らせたんだろ？」

「……………」

カズマが返答に詰まる。この反応のわかりやすさが、彼女を憎めない理由だ。ネクロマンサーを追い詰めるためならば、軍警察は生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）を捨て駒にすることも辞さない。相手が自分を利用する気だとすぐにわかるなら、対応の余地も大いにあるのだ。

「まーそんな落ち込むなって。利用してるのはお互い様だし」

「うっせ。つか、お前は現場に行かないのか？」

「…………」

今度はエチカが返答に詰まる番だった。走狗を捕まえたことを気付かれないうちに、狡兎たちの急所を捉える——いつもの彼女なら、間違いなく先頭を切って敵地に乗り込んで

いたところだ。
「ははあ……そうか、こないだのゴタゴタで叱られたな？」
「うっせ」
「うんうん、鴉済所長怖いもんなあ。あの笑顔」
「だよな」
　謎の連帯感が生まれる。凍京都内で最大の権力を持つ軍警察とも互角以上に渡り歩くのが、鴉済燎子の底知れない恐ろしさだ。エチカは大人しく、命じられた任務に徹する。
「中、入るぞ」
「暴力はほどほどにな」
「わーってる」
　ネクロマンサー徐福の関与が供述されたことで、生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）が頭を突っ込むだけの大義名分は揃った。ここまで来てしまえば、一般市民に被害を及ぼさない限り、行動にもかなりの権限が与えられる。
　エチカは扉を開けて、取調室の中へと入った。
「久しぶり」
「…………おう」
　それまでずっと俯き加減だった走狗の瞳が、初めてエチカに向けられる。取り調べを受

け疲労しているはずのその体の中で、ギラギラと光るその目だけは死んでいない。

——イヤな予感がする。

「あのねえちゃんか」

「こないだは世話んなったな」

「こっちこそ」

ドン！　と音がして机に叩き付けられたのは、スタン・カフをつけられたままの男の脚だ。水分・たんぱく質・脂肪が大半の人体の質量で、天板は凹まない。それは彼の脚が、みっしり詰まった金属部品でサイボーグ化されている証だ。

「着地ん時捻ってさ。おかげで逃げ損なったぜ」

「態度でけーな。水道橋で捕まったって？」

「ああ」

「徐福の居場所も吐いた？」

「まあな」

「なんで裏切った？　殺されっぞ」

「黙っててもお前らに殺される」

軍警察は横暴で、権力があり、だが意外と腐敗していない。疑わしきは罰せよ——白鳥女学院連続誘拐事件の容疑者である走狗を待つのは、どう贔屓目に見ても死刑以外にはあ

り得なかった。
「だったら取引に応じた方が得だ。俺は、ま、大阪にでも上手く逃げるさ」
だがエチカのカンは、目の前の男の嘘を見抜いている。
「何を企んでる？」
「自由をね」
「教えてやろうか？　モノの噂じゃ、電極パッドを取り付けてつまみを捻りゃ、速攻自由になれるらしいぜ。走狗ってだせぇチンピラが売ってるとさ」
「俺は、真面目に将来を考えてる」
仲間を裏切った以上、彼は生きて帰れない。それを誰よりよく知るはずなのに、怪しく光る走狗の瞳は輝きを失っていなかった。自暴自棄になっているのだろうか、いや——
「あのブサイクどもみたいに、人生に絶望しちゃいないのさ」
ブサイク。その言葉が、なぜかエチカの頭に引っかかる。かつて彼女も資料の中、誘拐された五人の写真を見てそう感じた。「私なんて、死ねば良かった」——久留間咲良のあの声と、その時噴き出した理由のわからないエチカの怒りが、ぼんやりと形を結ぶ。南海葑の跡目争い、ネクロマンサー徐福。
「どうしてあんな真似をした？」
「壬寅宮変(じんいんきゅうへん)って知ってっか？」

「……なんだそれ?」
「昔々大昔、嘉靖帝(かせいてい)ってえらい人がいてな。中国を支配し強大な権力を持ってた彼にも、ただひとつ、手に入らないものがあった。何だと思う?」
唐突に語り出す走狗を、エチカは不審げに見つめる。
「真実の愛?」
「それは存在しない。彼が手に入れようとしたのはただひとつ――」
このヒントが最初で最後だと言わんばかりの目つきで、走狗は囁いた。
「・・・・・・」
「不老不死さ」

△
△
△

凍京最大の合成肉工場は霞ケ関に存在する。現在凍京に流通する食料品の大半は、地球の寒冷化にいち早く対応して人工肉・人工野菜の生産技術を発達させたロシア政府の管理下で生産されていた。霞ケ関人工牧場産の人工肉は、やや淡泊さがあるものの人体に安全とされ、今この瞬間も多くの凍京都民の胃袋を満たしている。

安全な人工肉があれば、当然そうではない人工肉も存在する。廉価で口当たりもそこまで悪くないが人体には極めて有害、そもそも何の原材料から生成されるかも定かではない――そんな合成肉工場が、主にチャイニーズ・マフィアの縄張りに多数存在しているといわれていた。臥龍岡早雲が事務所のシーラカンスでやってきたのも、品川に存在するそんな合成肉工場のひとつだ。

自動運転公共車両ネットワークのビーコンがないこの地域を車で移動するには、自らハンドルを握る必要がある。ホットパイプが届くぎりぎりに存在する港沿いの建物は、一見すでに放棄されているような外観だが、そのパイプには辛うじて熱が通っていた。サビだらけの配管と、漏れ落ちる液体が作り出す玉虫色の水溜まりに顔を顰めながら、臥龍岡早雲はシーラカンスを停車させる。

「出ます」

『早雲クン、無理はしないでね』

「わかりました」

エチカならまだしも――と早雲は思う。体を防弾コートで覆い、背中には二丁のリ・エリミネーターを負うフル装備だが、戦いに来たわけではない。目的は情報の真偽の確認、ただそれだけだ。

車を出た途端フルフェイスヘルメット型のエクスブレインに届くのは、すぐ側の海か

ら漂う潮の香りではなく、鼻腔を掠める腐臭だった。思い出すのは、質の悪い合成肉工場にはリビングデッドの屍肉を用いたものもあるという、まことしやかな都市伝説。

ホットパイプの限界にちらちらとふる雪を眺めていると、「隣の廃工場に向かえ」――エクスブレインのサジェストが視界を覆った。使用者の脳の電気信号を読み取り意識・感覚を拡張、生身の脳では導き出せない無意識下の提案を、視界の一角にピクトグラムで表示することができるその機械は、早雲の操る近接銃術の要だ。

目標の建物は、一部窓ガラスが欠けている。まずは近隣の建物から中の様子を窺うのが最適という判断なのだろう。早雲は指示に従って、隣の廃工場の崩れかけた階段を上る。一歩一歩、光学情報の分析から危険と判断される部位への警告(アラート)を避けながら階を進み、屋根の剥がれた屋上へ。

鉄骨の隙間から、向かいの建物の内部が見下ろせる。エクスブレイン越しに光学補正をかませて、早雲は工場の内部を注視した。

目が合った。

ゆったりとした漢服に身を包む禿頭の老爺――工場の奥の暗闇で、息をひそめてカウンタースナイプを狙うかのように、瞳がこちらを見返していた。

出し抜けの警告(アラート)。

「燎子さん?」

エクスブレインが示した通り、メッシュジャマーで通信が寸断されている。凍京のインフラを支えるメッシュネットワークは性質上かなり信頼性が高く、その通信を塞ぐにはその地域にあらかじめ妨害電波発生装置を準備しなければならない。
つまりここは、すでに敵対者の支配地域だ。
「――――」
連絡が通じなければ頼れるのは己と外部電脳のみ。一度時間をおいて相手に警戒態勢を取らせるほうがリスクが高いと判断し、エクスブレインが指示したのは「作戦継続」だ。
直後、隣の合成肉工場からおぞましい人影が立て続けに飛び出した。人間の死体に死霊(レムレース)を注入しただけの、Ｌｏ－Ｆｉリビングデッド――通称「グール」だ。彼らはマスターのネクロマンサーの指示に忠実に従うが、その肉体には防腐処理などが一切施されていないから、時が経つにつれて腐敗していく。この周辺は熱量に乏しく劣化のスピードは遅いが、だからといって積極的に抱きつかれたい相手ではない。
早雲は両手にリ・エリミネーターを握り、崩れかけの屋根の格子を走ると、最上階から勢いよく跳躍する。オーダーメイド・ナノ粒子薬品で鍛えた軽くしなやかで強靭な肉体が、工場間の距離を一瞬で無にした。
朽ちかけていた木枠を蹴り倒し、早雲は合成肉工場の二階へ転がりこむ。室内をくねりのたうつパイプに片手をつくと、外から差し込む微かな光の中に積もりっぱなしの埃が舞

った。クリア。二階の設備はしばらく使われた気配がない。グールの大半が外に出払っているうちに勝負をつける――サジェストと共に早雲はすぐに階段を下り、目標への最短ルートの扉を開ける。

灯りの消えた部屋に、一際強い刺激臭が鼻をついた。馴染みの臭い。科学の粋を集めた消臭剤でも、決して消しきることができないあの腐臭。

一瞬遅れて部屋に灯りがつく。視界一杯に広がったのは、脚、脚、脚――いや、違う。まるで解体を待つ食肉のように、ハンガーに脚を引っかけられレールに逆さ吊りにされた、大量のグールたちだ。

「があああああッ!!」

「ぐがっ、がっ、ががが!」

「ぎが……がぃ……ぎぐぐ……」

錆び付いたハンガーが耳障りな音を立てた。軋みながら回るそのレールの下から、リビングデッドたちの腕がひっきりなしに伸びる。引き返している余裕はない。早雲は覚悟を決めて、レールが延びるその倉庫を真っ直ぐに進む。

対人戦闘を念頭に置いた通常の戦闘術ならば、逆さ吊りになった大量の敵を目の前に、どう対処するかを新たに考えねばならないだろう。だが――

立て続けのサジェスト。早雲は指示に従い、右に拳、左にローキック、更に上体を起こ

して胴を捕まえようとする敵の顔面に肘鉄を食らわせると、振り子のように揺れる体と共に次のレーンへ。

――まるでぼくはイタリアの種馬だ。

近接銃術では、無意識下の思考がエクスブレインに委ねられている。敵が正位置だろうと逆位置だろうと裏返しだろうと、早雲が頭に被る外部電脳が、現状の判断材料で最適な対処方法をサジェストしてくれる。早雲はただ、無心の装置になれば良い。外部電脳からピクトグラムという形で伝えられる入力を、適切に処理し出力する機械。

右、前、後ろ、左。レールが軋みハンガーが揺れる中、数え切れないグールの手が四方から突き出される。感情が抜け、痛みさえ感じなくなった死者たちは、肉体の自壊にさえ鈍感だ。腐りかけの指から骨が突き出してなお、生きた人間には不可能な強さで目標を狙い続ける。一度捕まれば、次々に現れる後続に覆い被されて、生死者追跡者(リビングデッド・ストーカー)といえども脱出は難しい。早雲は視界に現れるサジェストに集中し、グールの腕を適切にいなし続ける。

と、身じろぎをするうちにハンガーから外れたのだろう、一際大きなグールが脚を引きずりながら突進してきていた。早雲が認知したのは直前だが、対処を考える前にサジェストに従い体が動く。タックルに焦らず急がずマズルスパイクの先端を突き刺すと、発砲。軽い反動と共に放たれたＨＰ弾は、グールの頭蓋骨を貫通し中で変形、腐りかけの脳を内側から掻き回した。

腕を潰そうと脚を切ろうと、リビングデッドは活動を停止はしない。仮にマスターのネクロマンサーを殺したところで、命令を忘れて本能に任せた破壊活動を始めるだけだ。リビングデッドを完全に停止させる方法はただひとつ、脳の破壊。

リビングデッドは死体があれば大量に製造することができ、しかもその扱いが簡単だ。衣食住の世話は必要ないし、必要とあれば満員電車に一ヶ月間放置したとしても、文句ひとつ言わない。一匹いたら一〇〇匹いると思え——それが、リビングデッドを見かけた時、生きて帰るための鉄則だ。

それらの条件から近接銃術が導き出した対リビングデッド戦の基本コンセプトは、「体力・弾薬の消費を抑えながら、効率的に敵を倒し続ける」こと。あらゆる事態に対処しながら使用者の精神的負担を極力減らす外部電脳エクスブレインと、三〇連ロングマガジンが装着可能で打撃にも適したリ・エリミネーターを二丁用いて戦う近接銃術の基本スタイルは、対リビングデッド戦闘に最適化されている。

殴レ——殴る。

走レ——走る。

撃テ——撃つ。

余計なことは考えず、最大効率を求め、入力を出力に変える機械になる。それが、臥龍岡早雲の戦いだ。

吊られて自由に身動きが取れないグールを、殲滅する必要はどこにもない。最低限の発砲で、早雲はその倉庫を抜ける。

奥にあるのは、壁で区切られた小さな実験室だった。薄汚れた木棚の奥、小瓶に貯蔵されているのは黒色の液体——死霊(レムレース)。神経に擬似信号を送るマイクロマシン、機能が低下した内臓や筋肉を無理やり動かすための生体アクチュエータ、人工多能性幹細胞、その他諸々が渾然一体となって死体を動かす、ネクロマンサー特製の秘薬だ。

古風な実験器具に取り囲まれ質素な木の椅子に腰掛けるのは、先ほど視線の合った禿頭の老爺だった。

「貴様、何者だ?」

「特別生死者追跡者(スペシャル・リビングデッド・ストーカー)、臥龍岡早雲。お前は徐福だな?」

「いかにも。要件は?」

「白鳥女学院連続誘拐事件で、お前に聞きたいことがある」

「……走狗か。裏切り者めが」

濃い眉毛の下で、徐福の瞳が忌々しげに歪む。

「心当たりがあるようだな。一緒に来てもらうぞ」

早雲は防弾コートから、拘束用のスタン・カフとブラックアウト・カラーを取り出す。軍警察も使用するその拘束具は、電撃を放ち頸部を締め上げ、対象者を無力化することが

できるが――

「儂に触るな」

　徐福はさも当然のように、それを払いのけた。エチカが石榴大飯店前で戦った達人たちとまではいかないが、彼も武術を嗜んでいるようだ。

「反抗する気か?」

「偉大な研究を、ここで止めるわけにはいかんでな」

「研究?」

　問い返すその声が、建物に響く振動にかき消される。立て付けの悪い戸が震え、割れたガラスが甲高く鳴るが、壁の向こうからの音は更に大きい。鐘を突くでもなく、金属を打ちつけるでもなく、陶器を割るでもない。聞いたことはあるが、しかし桁違いに大きなその音の響きから、にわかにそれとは信じがたい。

　だが、壁の向こうから巨大な先端が飛び出して、早雲は信じざるを得なくなる。それは間違いなく、幼い子供が遊ぶ時に使うオモチャ――ガラガラの音。

「ゆけ、我が子よ」

　主の言葉を受け、周囲の壁さえ壊すような勢いで這い出たのは、立てば天井の梁に頭をつくほど巨大な赤ん坊だった。



▼
▼
▼

蒸気に煙る上野広小路の交差点に、ＫＡＲＡＯＫＥ皇帝（エンペラー）のネオンは今日も、めまぐるしくその彩りを変える。まだあの事件から一週間は経過しておらず、店員は当然エチカがこの建物で何を起こしていたかを記憶していた。はっきりと警戒されているし、恐らく盗聴もされているだろうが、だからといって呼び出しに適した場所が他にあるとは思えなかった。

エチカは狭いボックスの一室、入り口のすぐ側に陣取ると、浅くイスに腰掛ける。突然の依頼だったが、コン・スーのハッキングの腕は凍京一だ。無事に走狗を騙すことができたらしく、メールを受けて一〇分と待たないうちに久留間咲良が現れる。

逃さない。

覗き込む咲良はすぐに罠と気付き慌てて踵を返そうとするが、扉を開けたエチカが中に引っ張り込む方が早い。

「こ、こ、こ——！」

「こ？」

「ここここ、ここ、ここここ――」

咲良は唇を震わせ後ずさろうとするが、恐怖で体が言うことを聞かない。肉の向こうに埋もれそうな瞳がまん丸に見開くが、その焦点は何か意味のあるものを捉えているように思えなかった。度を超した緊張をほぐすように、エチカはニッコリ微笑みかける。

「えーと、ニワトリの真似？」

「こ、殺さないでッ！」

咲良の瞳に涙が滲む。

――そういえば、別れ際にチェーンソーで脅したんだっけ？

「ゴメンゴメン。あの時は気が立っててさ」

「…………」

「あーあー、そんな睨まないでよ」

「…………」

咲良は容易に緊張を解かず、それは決して悪くない傾向だとエチカは思う。彼女は頭より先に体を動かすタイプで、しゃらくさい理屈のやり取りが得意ではないが、丁々発止のやり取りで女性を口説くのはむしろ大好物だ。最初から心にこれだけの振り幅があるのは、彼女から秘密を引き出すために、決して悪い傾向ではなかった。

まず先手を取って、深々と頭を下げた。

「この前は、ごめんなさい！」

「…………」

真正面から見据えられて、咲良はわざとらしく視線を逸らす。明らかに、視線を合わせることに慣れていない反応。

「あの時は、あたしがどうにかしてた。走狗を逃してカッとなってて、あなたに八つ当たりなんかしちゃって……本当に、ごめん」

「…………」

平謝りするエチカに、咲良の緊張の度合いは更に高まる。いや、それは緊張と言うよりも――

「あたしが何を考えてるか、不安？」

「…………」

「そうね。心配するのもわかるよ」

「…………」

「…………」

咲良の沈黙にエチカは沈黙で応える。無言こそが最大のプレッシャーだ。心を開かせるための駆け引きは、事務所の所長鴉済燎子直伝だった。焦らせば焦らすほど効果が大きいのは、精神も肉体も変わらない。ただじっと相手を見つめる。例え視線を逸らされても

こちらの視線が向けられていることは、はっきりと伝わるものだ。
焦らして、焦らして、カラオケボックスを満たす沈黙に耐えきれなくなった咲良が、息継ぎのためにふと視線を上げたところを捕まえる。
「あたし、レズビアンなんだ」
「え……？」
不意討ちの独白に咲良の体は反応してしまう。報酬系は脳の無意識の奥に刷り込まれている。情報交換は生存確率を高めるのだ。
「恋愛対象は女性。男とのセックスなんて考えたこともない。あたしの親父は古いタイプだったから、日本人の労働力を増やさなきゃいけない、産めよ増やせよ……本気でそんな風に信じてやがってね。すごく強く当たられた。父親なんて大嫌いだった」
「…………」
「クラスでも孤独だったよ。ガサツでガマンが効かなくて、思ったことすぐ口に出しちゃうタイプだからさ。いらない反感しょっちゅう買ってた」
「…………」
沈黙の中、ほんの僅かに雰囲気が和らぐのをエチカは感じる。咲良も女だらけのお嬢様学校に通っている。彼女にとってレズビアンはむしろ親しみを覚える存在のはずで、しかも同じマイノリティに属する人間だ。親近感を覚えるのも無理はない。

「でもあたし、アンタは抱けないね」
そこで突き放す。

「ブサイクだもの」

咲良はあらゆる感情を抑えて無に自分を沈めようとして、それでも体の震えを、乱れる呼吸を、揺れ動く視線を、制御することができない。全身から漏れ出す身じろぎの切れ端が、動揺を雄弁に物語る。微かな綻びの先端に、重く鈍い刃の切っ先をねじ込んで、エチカはその穴を広げた。

「なまじ育ちが良いばっかりに、誰も、本当の事を言わなかったんでしょ。上辺だけの付き合いだった。ホントは向き合うべきだった自分の醜いところを、誰も教えてくれなかった。誰も教えてくれないからそのままでいいやって、貴方は目を逸らし続けた。勉強はいいよね、やれば褒めてくれるから。そんな風に騙し騙しやってきて、楽に楽に流されて、そんな貴方がとうとう行き着いた先が、友達をマフィアに売ってドラッグをせびる薬中よ」

「違う！」

とうとう、咲良が自ら口を開く。

「違うの！　私は、マフィアだなんて、みんなをどうしたとか知らなくて――」

「言っとくけどね」

戯言を一言で黙らせて、その先を溜める。思い起こせば、エチカは最初から気に食わな

かった。燎子からもらったプロフィールに腹を立てたし、最初にこのカラオケボックスで窺った挙動は、ひとつひとつがエチカの心を苛立たせた。事前の作戦を無視して飛び込んだのは、そのせいだ。

「見てくれじゃないよ、アンタをブサイクにしてるのは」

「――――」

刻が止まり、呼吸さえ止めるかのように動かなくなる咲良。

何も望まず、ただ与えられた状況に甘んじて、ただ流されて生きているだけ、ただ楽に落ちていくだけ――その自堕落さの元凶を、欲望と名付けるなら、確かにそうなのだろう。だが、エチカはそんな欲望を抱きたいとは思わない、当然抱かれたいとも思わない。

そう、それが核心だ。

「アンタさ、セックスしたことある？」

「いっ、ひっ、ひ、ひ、ひひひひ……」

咲良は机に突っ伏したまま、嗚咽を漏らした。堰が決壊したように、巨体が激しく震えだした。

「ど、どど、どうして、みんな、そ、そんなこと、訊くの……？」

「走狗にも、そう訊かれたんでしょう？」

「そ、そんな……そんな、こと……」

最後の一押し。エチカは刃を尖らせ、切り込んだ。
「アンタが紹介したその友達――みんな、処女だったんじゃない？」

△　△　△

投射されたホログラムではないかと本気で疑ったが、エクスブレインはそれが現実の光景であることを冷徹に告げていた。徐福の言葉に従うように、巨大なガラガラを手に這い出たのは、象ほどのサイズをした赤ん坊によく似た何か。不安定な頭がゆらりと揺れて、巨大な眼球がぎょろりと早雲を捉える。白目を覆い隠すように走るその血管は――赤黒い(ダスキーレッド)。
「Ｈｉ－Ｆｉか」
早雲は視線を戻すが、徐福はすでに吹き抜けの二階へと跳躍し逃れている。早雲が思い出すのは、旧世紀のカンフー映画で軽功と呼ばれている身のこなしだ。体に多少の改造があるのは間違いなく、片手間に対処できる相手ではないだろう。
判断の速度と精度が生死を分ける。エクスブレインは即座に目標を設定、早雲は正面のＨｉ－Ｆｉに向き合った。重い頭がぐらぐら揺れながら近づき、ガラガラが耳障りな音を立

てる。赤ん坊よりも更に体のバランスは悪く、むしろ胎児といったほうが良いかもしれない。皮膚の向こうにうっすらと血管が透けて見えるが、それは人間よりもドス黒い死人の色に間違いない。

ＨｉｰＦｉリビングデッドの製作法はネクロマンサー同士で共有されているから、重武装型リビングデッドや戦車級リビングデッドなど、ある程度の類型化が可能だ。早雲が身につけるエクスブレインは、ホログラフィックメモリに記憶されたローカルデータベースを検索、敵のタイプに最も近い種類をピックアップすることができる。戦闘中に敵のタイプを分析し、現状から最も効果的な敵への対処法を導き出す――それが、エクスブレインの強みだ。

が、その頼もしい相棒が、今は敵の種類を判断できずにいる。

「オリジナルか」

徐福が基本設計から行った独自のＨｉｰＦｉならば、既存の枠組みに当てはめることが難しいのも理解できる。早雲も一通りのタイプを記憶しているが、こんな異形のリビングデッドは見たことがない。

いずれにせよ、リビングデッドの弱点は「脳」だ。

早雲は容赦なく赤ん坊の脳天にＨＰ弾を撃ち込む。パン、パン、パンと乾いた音を立てて、赤ん坊の頬が弾けた。衝撃でぶるんと震える肌に空いた銃創は赤黒く、まるで皮膚に

闇が覗くようだ。
だが、肉に阻まれ脳までは届かない。
「――――ッ!?」
警告。早雲の体が無意識に反応し、打ち下ろされるガラガラを間一髪で躱す。
驚いたのは、その時既に修復されつつある頬の傷だ。リビングデッドには治癒能力がない。ナノマシンで擬似的に治癒能力を再現することは可能だが、それも形状記憶合金のようにかなり無理矢理で、リビングデッドの体は壊れれば壊れっぱなしなのが常識だ。だがあの赤ん坊の傷は、人間の傷の治りを早回しにしたようにふさがって、瘡蓋までできている。
死者なのに、まるで生きた人間のようだ。
「くっ!」
がらん、ごろん、がらん、ごろん!　立て続けに振り下ろされるガラガラを軽いフットワークで躱しながら、早雲はエクスブレインに従いカートリッジを交換する。今まで使っていたのは、対Ｌｏ－Ｆｉ用に殺傷力を重視したＨＰ弾。これでは肉が分厚い赤ん坊の脳に到達することが困難で、代わりにより貫通力の高いＡＰ弾で脳の破壊を試みる。
横薙ぎに払われるガラガラをベリーロールで躱し、床を転がりながら発砲。
命中。

ひぐっ、と奇妙な呻き声を上げて、赤ん坊の体が痙攣する。エクスブレインはその運動量と体組成から、弾丸が脳の中心部まで到達したことを明示した。

沈黙が、倉庫を満たす。

リ・エリミネーターを構えなおした早雲は、遥か頭上の梁を見上げて尋ねた。

「どうして、こんなバケモノを？」

「ふん……」

徐福は緩やかな袖口を翻し、顎から伸びた白髭をゆるりと撫でる。

「これで終わりだと？」

「――――!?」

エクスブレイン一杯に広がるアラート、直後に早雲の体は回避行動を取ろうとするが、

――おぎゃあああああ!!

辺りに響く大音量の泣き声に動揺し僅かに反応が遅れる。ガラガラで揺れる世界。腰を打たれトラックにぶつかったような衝撃が早雲を襲い、吹き飛ばされた体が宙を舞う。回る世界の中でエクスブレインが捉えたのは、即座に修復された銃創とそこから流れ出た赤黒い血、掻き回された脳の欠片、そして変形したＡＰ弾で、その意味を考える前に工場の柱が目の前に現れた。衝突。落下。

警告が視界一杯に映し出される。先ほど強打された腰へのだめ押しで、まともに立ち上

がることができない。
赤ん坊は、撃たれる前と寸分違わぬ動きをしている。先ほどの僅かな間は、自分が撃たれたことを認識するまでのラグにしか過ぎないのか。早雲が痛みを噛み締めながら両腕の力だけで体を起こすと、徐福が軽い足取りで地上に降り立った。
「どうだね、我が研究の偉大なる成果は」
「研究……？」
「ネクロマンシーとは死者に生命を与える秘術。死者に生を与えることが可能ならば、生者から死を取り除くことも可能だ」
馬鹿げた話だと早雲は思った。ネクロマンシーは当初こそ不老不死への架け橋ではないかと期待されたが、擬似生命活動は擬似生命活動にしか過ぎず、結局不老不死が不可能であることは定説となっている。いくら手をかけたリビングデッドといえども、脳をやられてしまえばそれで終わりのはずだった。
だが目の前の巨大な赤ん坊は、脳内をＡＰ弾でズタズタに裂かれてなお、生死者としての活動を続けている。ひぐっひぐっと先ほどの泣き声の余韻を引きずりながら近づくそのバケモノから、早雲は逃れられない。両手の力だけでは這いずり回ることすら困難だ。
「さあ、生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）」
徐福は赤ん坊の傍らに立ち、憐れみすら籠もった瞳で告げた。早雲はもう逃げ場がない

ことを悟る。
「偉大なる実験の犠牲になりたまえ」
赤ん坊の体が、二人羽織のようにぎこちなく動く。マスターの命令に応え、頭上に掲げられた巨大なガラガラが――
頭上で突然砕けた。
「な――誰だ⁉」
振り返る徐福の視線の先、早雲が忍び込んだ二階から直接梁を伝ってやってきたシルエット――その手には、彼女が今撃っただろうＡＫ‐五〇が握られている。
「遅いぞ」
「わりー。差し入れ探すのに手間取ってさ」
牙野原エチカ。早雲の心強い相棒。
「ふん。いくら人手が増えても同じこと。我が息子よ、やって――」
――おぎゃあああああ‼
徐福の声を、時間差で、赤ん坊の泣き声が遮った。お気に入りのガラガラを失った癇癪――それがマスターの命令でないのは明白だ。ネクロマンサーは意図すれば、自分が作ったリビングデッドの動きを強制的に制御することができる。だが既に腕は振り回されており、それを制止するには慣性の法則を無視する必要がある。

間に合わない。
振り回された赤ん坊の腕は、傍らに立つ徐福の体を吹き飛ばす。響く赤ん坊の号泣の中、呆気なく徐福の頭が潰れた。

▼
▼
▼

「えーマジかよー」
目の前で目標が死に、エチカはぼやく。借りを返そうと散々準備をしてきたのだが、こんな結末になるとは想像だにしていなかった。
エチカは屋根の梁から飛び降りて、床に倒れる早雲へ尋ねる。
「立てるか?」
「ひとりじゃ無理だ」
「はぁ。ドジ踏みやがって」
このまま早雲を抱えて逃げることもできなくはない。だが――
――ぎゃああああああああ!!

目の前には相変わらず、大のお気に入りを失って泣き叫ぶ赤ん坊の姿があった。マスターを失ったリビングデッドは本能のままに活動を継続、そのほとんどは破壊衝動に身を任せる。

「放っておくわけにはいかねーよな」

「笑ってるぞ」

「仕事熱心だからさ、あたし」

いつものやり取り。エチカは体中にほとばしる熱い戦いの予感を、ＡＫの銃口から吐き出した。ババババン！　ババババン！　正確無比な弾丸は、暴れ回る赤ん坊の脳を見事に破壊するが――

「すげえ！　すげえ！　何あれ⁉」

赤黒い血を噴き出す銃創は、みるみるうちにふさがっていく。

「傷がすぐに回復するみたいだ。体も、頭も」

「なるへそ。で、チミのエクスブレインはなんて？」

「データベースにないってさ」

「だろーね！」

エチカは躊躇わず赤ん坊に接近、耳を劈く叫び声に頭をクラクラさせながら、手負いの早雲を守るため、とにもかくにも自分に注目を集める。振り回される腕は大味で、避ける

こと自体は難しくない。だが至近距離から撃ち込んでも、ホウ素火薬は致命傷を与えられない。試しにバヨネットで腹部を切り裂いたが、中からだらりと赤黒い血の塊が垂れただけで、直後何事もなかったかのように傷が修復した。

「時間稼ぎ！」

無策で戦っても消耗するだけだ。となれば採るべき方法は――

「稼いだところでどうにも――」

「なるさ」

早雲の反論は途切れて消える。エチカがここに来る直前に仕掛けたコン・スー特製のウイルスが工場のセキュリティを突破、メッシュジャマーが無効化されたのだ。

これでエクスブレイン内のローカルデータだけではなく、ネットワーク越しに無限の情報へとアクセスしながら、敵の正体を推測することが可能になる。

それは、床でサボる早雲の役目だ。

エチカはエクスブレインの使用を好まない。自分の五感をフルに働かせながら、皮膚にビリビリ伝わる感覚と直感的に湧き上がるカンを武器に戦う。泣き声と共にダイブする赤ん坊をたった二足で飛び越え、ＡＫを撃つ、撃つ、撃ちまくる。

戦闘の最中、エチカは上機嫌に訊いた。

「なあ早雲！　徐福の元ネタ知ってっか⁉」

「元ネタ？」
返答する早雲のエクスブレインは、メッシュネットワークから即座にインフォを引き出すだろう。徐福——それは紀元前に中国で始皇帝に仕えた方士と同じ名だ。広大な領土を統一した偉大なる皇帝も、年を重ねるにつれ自らの死を恐れ、不老不死の妙薬を探し求めたのだという。
南海帮を揺るがしていたのは、跡目争い。
「赤目は、不老不死を求めていた？」
「多分ね！」
「でも……それと事件と、なんの関係が？」
「処女を捜す時、お前ならどうする!?」
処女と非処女を外見的特徴から明確に見分けることは困難だ。そこで走狗が目をつけたのは、凍京で最も異性との接触が少ないと見こまれる名門女子校、白鳥女学院の生徒。しかも外見的にパッとしない「ブサイク」なひとり——久留間咲良だったというわけだ。
異性や年の離れた人間から性事情を聞き出すことは困難だが、同じグループに属する女生徒同士なら比較的容易に話すだろう。走狗は咲良を電気信号ドラッグ漬けの言いなりにしておいてから、処女と思われる女生徒を連れてこさせた。
「走狗がヒントをくれた！　『壬寅宮変』——皇帝が不老不死の丹薬を求めて、穢れなき

処女の経血を集めさせたんだと！」

ひらりと身を躱しながら吐き捨てる。その人体実験の過程で生まれたのが、今目の前で拳を振り下ろしている巨大な赤ん坊のバケモノなのだろう。

「そんなのオカルトだ」

「ああ。リビングデッドもな！」

リビングデッドの存在は、現代科学だけでは説明できない。その意味で、この世にオカルトは確実に存在する。

「でも、コイツを作って、赤目は不老不死になれるのか!?」

「え？」

正論に、エチカの思考が一瞬止まる。

「――ッ!?」

突き出される腕を躱そうとして、床を蹴ろうとしたブーツの先が滑る。足元に吐き出された赤ん坊の涎。バランスを崩したエチカの体は、やわらかく暖かい手のひらで鷲掴みにされる。ＡＫごと握りこまれ、エチカはトリガーを引くことすら不可能だ。太股に当たる生ぬるい感触は、きっとバヨネットに食い込むＨｉ－Ｆｉから噴き出した赤黒い血（ダスキーレッド）だろう。

容赦のない圧力に、エチカの全身の骨が軋むのがわかる。呼吸をすることさえままならない。血流が滞っている。意識が遠ざかる。どこからか銃声が鳴り響いた気がするが、遠

くてよくわからない。消えていく。死ぬのか、こんな所で。不気味な赤ん坊のＨｉ－Ｆｉの涎に足を滑らせて、握りつぶされるなんて間抜けな死に方で。そんなんでいいのか？　いいか？　いいわけがない。こんな所で消えてたまるかコンチキショウと、エチカは唇を噛み締めて、

――マジかよ？

見上げる視界に天使が映る。

△　△　△

「ぐ……んぐっ、ぐぐぐ……」

「エチカッ！」

早雲は、床に倒れたままリ・エリミネーターを撃つ。握りつぶされかけている相棒をなんとか助け出そうとするが、銃創はできた先から次々と塞がっていく。エチカの体は苦しげに喘ぎ、最早その声すら聞こえない。撃って、撃って、撃って、撃って、だが脚の動かない早雲に打つ手は――

突然、工場の天井が明滅した。天井からぶら下がるライトを巧みにコントロールして、漂う蒸気に陰影が浮かぶ。背中に羽根の生えた天使が、白い光を纏ってグルグルと回転、四方のスピーカーからは割れんばかりのオルゴールが流れ出し、まるで赤ん坊をあやす遊具のようだ。

「メリー」――エクスブレインはその名称を教えてくれる。

『間に合った⁉』

「燎子さん？」

メッシュネットワークが復旧したので、エクスブレイン越しのこちらの映像は事務所に届いている。

『コン・スーちゃんのプログラムよ』

「ありがとうございます！」

マスターを失ったリビングデッドは、その自我が消えてしまえば、本能の赴くままに動く。最後まで残る感情の切れ端が、頭上で回るメリーに引きつけられ、エチカの体を握る手の力が緩んだ。

「こんの――」

エチカがＡＫ-五〇を赤ん坊の指から引き抜き、バヨネットの先端を手首に突き刺す。刃は赤黒い血を滲ませて皮膚を食い破り、同時にＷＡＳＰナイフのトリガーが引かれた。

赤黒い血肉の小爆発。交換式のカートリッジに充填された高圧のガスが先端から噴出し、赤ん坊の手が吹き飛ぶ。

「がっ！」

拘束が解かれ、エチカは床に転がった。おぎゃあああ、と泣き声を上げるＨｉ－Ｆｉは、さすがにメリーから意識が離れ、千切れた腕を振り回し暴れ回る。

「大丈夫か？」

「赤子の手ぇ捻るようなもんだ」

距離を取ってエチカは嘯く。あれだけの圧力を受けて無傷なわけはないが、彼女は死んでも軽口を叩くだろう。

「そっちのサンプリングは？」

「今、結論が出た」

早雲の視界には、エクスブレインのインフォが表示されている。外部電脳は戦闘中も相手の動作の新たなデータを元に学習を続け、推論を行い、データを検索・照合する。リアルタイムで弱点を探り出す――それが、エクスブレインのもうひとつの強みだ。外部電脳の画像解析エンジンは、ＷＡＳＰナイフでバラバラに砕けた腕の欠片から、意味ある部位を見つけ出していた。

「あのＨｉ－Ｆｉには、五つの子宮が埋め込まれてる」

「――なんだって？」

「死体の中に生体の一部があるんだ。死者が再殺されるたび、脳つきの子宮が新たな受精卵を排出する。それは高濃度増殖因子で急速に成長、死者の体と同化して新たな人体となる。今みたいに」

泣き声に振り返れば、先ほどＷＡＳＰナイフでバラバラにしたＨｉ‐Ｆｉの手が、今まさに生え直したところだった。よく見れば赤ん坊の巨大な腕は、女性の腹部に似ていなくもない。恐らく再び、新たな子宮が再生されたのだろう。

「やれやれ……誘拐された女の子が、こんな形で生きてるなんてな」

エチカはぼやきと共に、早雲にＡＫを投げてよこした。彼女自身はコートにしまい込まれていた携帯チェーンソー「ラビットパンチ」を手に掲げ、エンジンを唸らせる。

「んじゃ、オネンネさせてやっか」

「ああ」

敵の弱点が明らかになれば、エクスブレインの連絡も必要ない。言葉を交わさずとも、お互いに何を為すべきかを知っていた。ふたりは生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）――死体を殺すのが生業だ。

「くたばれえええぇッ!!」

かなりダメージを受けているはずなのに、エチカの動きは機敏だった。ピンチになればなるほど彼女は燃える。泣きわめくＨｉ‐Ｆｉの腕をかいくぐり、まずは右腕を切断。胴で

押し潰そうとするその足元を駆け抜け様に、左脚をぶった切る。体が傾ぎ、バランスをとる左腕を背後から突き刺し破壊、棒立ちになったところを早雲が構えるＡＫ－五〇が狙撃した。腹部を弾丸が穿ち赤黒い血の向こうにズタズタに切り裂かれた子宮が見える。獣のような咆哮を上げながらうつぶせに倒れるＨｉ－Ｆｉの右脚を、エチカは雄叫びと共に切断した。

「しゃあああッ!!」

各部に埋め込まれた子宮がお互いを再生する前に、間髪入れず全ての器官を破壊――これで、再生は不可能だ。両手足を破棄されたＨｉ－Ｆｉは、人間とは似ても似つかぬ雄叫びを上げながら、ジタバタと地を這うだけ。

早雲の正面に、うっすらと毛が生えた頭頂部がある。頭蓋骨の継ぎ目、大泉門を狙えというエクスブレインのサジェスト。

早雲は躊躇わない。彼は入力を出力に変える機械。軽い反動と共に、工場中に銃声が鳴り響く。じゅぶっと生々しい音を立て、Ｈｉ－Ｆｉの脳がかき乱され、動かなくなる。再生器官を失ったそれは、もう通常のリビングデッドと変わらない。赤黒い闇を覗く頭頂部の傷は癒えない。メリーがジジッと瞬いて消滅し、割れたスピーカーからオルゴールの音は流れない。

後に残るのは、赤黒い死肉に汚れて蠕動する、五人の処女の子宮の残骸だけだった。

▼
▼
▼

白鳥女学院連続誘拐事件の首謀者と目されるネクロマンサー徐福は、鴉済生死者追跡事務所との交戦中に死亡。その直後、伊豆の別荘に滞在中の赤目が病魔に耐えかね自殺、妻の石榴も共に命を絶ったというニュースが飛び込んできた。

タイミングから推し量るに、徐福へと託していた不老不死の研究が無に帰して絶望したのだろう。そう判断した鴉済燎子は余計なことに口を突っ込むことなく軍警察から賞金を獲得、臥龍岡早雲の大怪我も軍警察附属病院の治療で無事全快した。

これで白鳥女学院連続誘拐事件は一件落着——そう思い込もうとして、しかしエチカはなんとなくスッキリとしない。

そんな風に過ごしながら一週間後、彼女はアメホコで偶然彼に出くわす。

「ゲッ！」

「あ……オイコラてめぇ待て！」

呼びかけを無視して逃げるのは、情報提供の取引で放免された走狗だった。人ごみに紛

れる痩せぎすの背中を、エチカはすぐに追いかける。賑わうアメホコの買い物客の間を縫い、立ち上る生臭い蒸気の香りを切り裂きながら、倒れた鞄屋の棚と罵声を飛び越える。今度こそは逃がしてなるものかと、負けず嫌いの血が騒いだ。

「どりゃあああっ!!」

「がはっ!」

ガード下へと逃げ込もうとしたところにエチカはタックル。立ち飲み屋に飛び込み机をいくつも薙ぎ倒しながら、ガッシリと脚を掴んで意地でも離さない。

「おいコラ! 何で逃げんだよ?」

「追いかけるからだろ! てめーこそ、なんで追いかけんだ!」

「え……?」

問われてはたと考え込む。軍警察から釈放されている以上、鴉済生死者追跡者のエチカは彼を捕まえる理由を持たない。何か尋ねなければならないことがある気もするのだが――

「おい、なんで追いかけたんだって訊いてんだよ!」

「いや、その……」

もごもごと、返答する。

「別に、逃げたから追いかけただけで」

「てめーには言われたくねーし！」

なんだか気が削がれる。走狗も恐らく緊張が解けたのだろう、溜息交じりにエチカの腕を払いのけた。

「ったく、なんだよ、その速さ」

「あたし、昔っから鬼ごっこは得意なんだ」

「ちぇっ。走狗の名前が泣くぜ」

吐き捨てて、頭にかかったコップ酒を払う。エチカも憮然として立ち上がり、周囲の酔っ払いへと詫びを入れた。真っ昼間からここで飲むような連中は、ケンカを売るべき相手を弁えている。店員も最早慣れっこなのだろう、エチカがポンと現金を置くと、その場はすぐに収まった。

「用がないなら行くぜ」

「お、おい」

走狗が歩き出すその先には、やはり見覚えのある人影があった。黒いスーツのチャイニーズ・マフィアに周囲を守られた、子供のように小柄な男——狡兎だ。赤目が亡くなった後、南海幇切っての知性派である彼が、組織を仕切っているらしい。

その義眼は明らかに走狗の姿を認識しているが、しかし敵対しているという感じではな

く、むしろ仲間を迎え入れるような雰囲気だ。

「――なあ」

エチカの口から、ふと疑問が口をついて出た。

「今回の事件は、何だったんだ？」

「言っただろ？」

走狗はギラギラ光るその瞳を、意味深に歪めて笑う。

「『壬寅宮変』だよ」

それは取り調べの時に聞いた。

南海幇の皇帝こと赤目は、処女を集めて不老不死の妙薬を作らせた。徐福と共にいたあのＨｉ‐Ｆｉは、その研究の産物だろう。だが、まだ何か見落としがある――直感に促され、エチカはその先を尋ねようとする。

その時にはもう、走狗は狡兎と共に、上野の人ごみに姿をくらましていた。

△
△
△

「私たちは利用されたのね」
鴉済生死者追跡事務所でコネリン越しに報告を受けた燎子は、パピルスを片手に軽く肘を突く。
『利用?』
「ええ。まんまと乗せられたってわけ」
『燎子さん』
コネリンから投射されるホログラムで、エチカはジッと燎子を見つめた。
『ごめん、全ッ然意味がわかんない!』
彼女の頭脳労働に対する諦めの早さは人一倍だが、今回ばかりは早雲も同感だ。鴉済燎子は事務所の頭脳。彼女の深い洞察力がなければ、いくつの事件の真相が闇に埋もれたままだったかわからない。
今回もまた、彼女の推理が真実を照らす白い光となった。
「南海幇にとって走狗は、裏切り者だったはずよ」
『あーそっかそりゃそーだアイツそんな話した! 大阪に行くとか言ってた!』
ネクロマンサー徐福の居場所をリークした走狗は、組織への反逆者として扱われて当然だ。その彼が現幇主の狡兎と親しげにしていたということは、明らかに何か裏がある。
「徐福が死んだ直後に、伊豆で赤目が自ら命を絶ったと言われているわ。でも、決断が早

すぎると思わない？」

「諦めが良すぎるとは思いました」

早雲は、石榴大飯店から出てきた赤目の巨体を思い出す。どっしりと構えたあの幇主は、病魔に命を奪われかけている男の姿には見えなかった。

「ヒントは走狗の言った『壬寅宮変』――一五四二年、明の嘉靖帝が後宮の寝所で官女に殺されかけた事件よ」

「皇帝の、暗殺未遂事件？」

「原因には諸説あるけど、当然筆頭に上がるのは『権力闘争』。その首謀者として、妃嬪（ひひん）の曹端妃（そうたんひ）が凌遅刑（りょうちけい）に処された」

夫人が皇帝を殺そうとした――早雲はようやく、燎子が言わんとしていることを悟る。

「赤目は既に殺されていた？」

裏から組織を牛耳るためには、幇主を殺してネクロマンシーで操るのが一番だ。老いて病んだとはいえ赤目は人並み以上に動けたはずで、そんな男を殺すのに、無防備な閨を共にする妻はうってつけだろう。早雲の脳裏に、夫と共に車に乗り込む石榴の隠しきれない笑みが、鮮やかに蘇る。

燎子は静かに推理を続けた。

「ある日、組織で次期跡目候補の一人とされていた狡兎が、石榴の悪事に気付いた。早雲

クンなら、どうする？」
「南海昇を纏めているのは赤目のカリスマです。狡兎がまともに事実を明かしたら……組織が空中分解しかねませんね」
「その通り。だから見た目の上では赤目が病死して、石榴もその後を追った——というシナリオを書かなければならなかった」
「実際は、赤目のマスターの徐福を殺すことで、彼の側にいる石榴に襲いかかるように仕向けた、ってことですね」
『シチメンドクセーことすんなぁ！』
エチカがコネリン越しに叫ぶが、早雲も同感だ。マスターを失ったリビングデッドは、破壊衝動のままに周囲の人間に襲いかかる。赤目が石榴と共に伊豆の別荘に籠もったタイミングを見計らい、走狗に徐福の居場所を吐かせたとすれば、それは大いに回りくどいが計画的な殺人と言えるだろう。
「まあ、全ては根拠のない推測。私たちの仕事は白鳥女学院連続誘拐事件の解明のみよ」
燎子はコーヒーを飲んで、苦々しく顔を歪めた。好奇心は猫を殺す。余計なことに首を突っ込まないのが、この業界で長く生き続ける秘訣だ。
「となれば、一連の誘拐殺人は徐福への報酬ですか？」
「そう考えるのが自然でしょうね。徐福を繋ぎ止めておく一番のエサが、彼の念願である

不老不死の研究の材料提供だった」
「確かに、あんなバケモノを作ったところで、赤目が不老不死を手に入れられるわけじゃありませんしね」
『んー、でもね。まだなんかこー、引っかかるんだよなー』
「引っかかる？　どの辺りが？」
『どっこら辺かなー。そもそもなんでこんなことになったかが、イマイチピンとこないっつーか……』
「だから、具体的にはどこが？」
『いや、だからさ――ってゴメン、時間！』
「時間？」
『うん。デート。そいじゃねー！』
エチカは一方的にコネリンの通話を切った。
相変わらず勝手気ままなエチカ節に、早雲と燎子は顔を見合わせて息をつく。彼女のカンはよく当たるから、できればぜひその原因を聞き出したかったのだが、こうなってしまえば為す術はない。
首を小さく振りながら、早雲は尋ねた。
「相手は阿蘇少佐でしょうか？」

「あ、聞いてない？　意外な人とデートするみたいよ」
「意外な人？」
鈍い早雲のカンは、やはりデートの相手を全く思いつくことができなかった。

▼
▼
▼

縦横に走るホットパイプを潜り、凍京一の商業地帯アメリカ歩行者天国を南に下って右手に折れる。色とりどりの龍のネオンが輝くＫＡＲＡＯＫＥ皇帝（エンペラー）の下、巨体を窮屈に縮こまらせて立っていたのは――
「ハーイ！　久しぶり、咲良ちゃん！」
「…………」
「よかったー元気そうじゃん」
「…………」
久留間咲良は、以前と全く変わらない。俯いて絶対に視線は合わせずに、だがじっと話を聞いている気配があった。だから返答がないにもかかわらず、エチカは続ける。

「あの後色々あったでしょ？　あやうく少年院に入れられそうだったたって聞いたよ。ま、アンタがやっちゃったことからすりゃ当然だよねー」

「…………」

「知ってる？　仲間を裏切った人間ってさ、施設の中でそりゃ酷い目に遭わされるみたいだよ。それこそ、死んだ方がいいような」

「…………」

「アンタも死にたいって言ってたからさ、もしかしたらこれがきっかけで死ねるかもね」

「…………」

「それとも、あたしが殺してあげよっか？　そういうの仕事だから、結構得意だよ！」

「…………」

「あー、嘘ウソ冗談だって。そんなひかないでよー」

「…………」

「んじゃ早速、中入ろっか。よーし歌うぞー」

店の前での長い一人芝居を終えて、エチカは咲良に手を重ねる。肉厚で汗ばんだ彼女の手のひらは、触れた瞬間ビクッと震えるが、そこから少しも動こうとしない。引っ張っても無反応を装っている。

「ん？」

「………」
「カラオケ、行かないの？」
「……どうして？」
艶やかな黒髪に五色のネオンを反射させたまま、咲良が尋ねた。
「どうしてって、何が？」
「どうして、私を、呼んだの？」
エチカが担当した白鳥女学院連続誘拐事件は既に解決していて、もう聞き出さなければならない情報はない。単に咲良が好みのタイプかというと、そんなことは考えづらい。咲良からしてみれば、それは当然の疑問だ。
「ま、正直わっかんないんだよねー、あたしも」
あっけらかんと、エチカは頭を掻く。
「理屈とか考えると頭痛くなっからさー。あたしはあたしが信じるカンに従って、アンタをここに呼んだ、それだけかな」
「………」
「それで、アンタは？」
「え……？」
「アンタはなんで、ここに来たの？」

「…………」
　思いも寄らない問いかけだったのだろう、握ったままの咲良の手のひらに、うっすらと力がこもる。肌の光の反射は周囲に舞う蒸気か、それとも緊張から来る彼女の汗か——
　エチカはただ黙って言葉を待った。無言こそが最大のプレッシャーだ。騒がしい上野の雑踏が遥か遠くに後退して、か細い咲良の呼吸だけがやけにはっきり耳に届く。
「え……エチカ、さん」
　やがて静かに唇が動く。惑いながら、懸命に縋る先を探しているおぼつかない言葉。
「私……どうすれば、良いのかな？」
「良いと思うよ。そのままでも」
「…………」
「少年院、入らずに済んだんでしょ、お父さんのおかげで」
「…………」
　咲良は白鳥女学院に入れるほど良いところのお嬢さんだ。権力か金か、あるいはその両方かを用いて少年院入りを回避できたのなら、普通はそれを幸福と呼ぶだろう。
「いーじゃん、お金には困んないんだし。ネットに情報は残って、一生嫌がらせをされちゃうだろうけど、今まで通り自分の中に引きこもっちゃえばカンケーないっしょ？」
「…………」

「それとも——」
エチカはしゃがみこんで、まだ俯いたままの彼女を試す。
「少年院に入りたかった？　罰を受けたかった？　そうすれば、何かが変わると思ってた？」
「……わからないの。本当に、わからない」
「わ・か・り・た・い？」
「——エチカさん」
瞳が合い、久留間咲良は問いかける。
「私とセックス、したいと思う？」
エチカは唐突に閃いた。
徐福が凍京への密航に成功したのは今から六年前。あの徐福とかいう仙人モドキは、ずっとあのバケモノを作っていたわけではなく、最初のうちは赤目のため妙薬の調合を試みていたのではないだろうか？　若い処女を誘拐し、その血を使って不老不死の丹薬を作る——その試みを、正妻の石榴が誤解していたとしたら？
正妻の自分を差し置いて、若い女が赤目の元へと連れこまれる。しかも夜な夜な、極秘裏に。石榴は美貌で今の地位を射止めた麗人だ。客観的に見れば、ブサイクな小娘たちに嫉妬するなんて馬鹿げているかもしれない。

だが、石榴が心から赤目を愛していたとしたら？　彼女が赤目を殺した理由が、権力欲ではなく嫉妬だとしたら？　愛する人を自分のものとして留め置くために、ネクロマンシーを施したのだとしたら？

石榴の目に、攫われてきた少女たちは、どう映っただろうか？

「…………」

エチカの目に、久留間咲良は、どう映っているだろうか？

相変わらず、自分なんて死ねば良いと呟き続けるブサイク？　傷を負うことを覚悟で自分に向き合いたいと思う、一人の人間？　それとも、告白の答えに心臓を高鳴らせる、かわいらしい女性？

「まずは――」

「わっ」

久留間咲良の巨体は、鍛え上げられた生死者追跡者（リビングデッド・ストーカー）の腕力で、軽々と引き寄せられる。

「お友達から、始めましょ？」

石榴の味は知らないが、これならエチカも知っている。この実は甘美で、愛おしく、そして何より残酷だ。エチカは罪作りとは知りながら、それこそ生きる証だと、五色の龍の建物に久留間咲良を連れ込んだ。

〈了〉

あとがき

ニトロプラスのゲームは設定がすごい！　とか言われるといやいやそんなことないんじゃないかなあシナリオ的には、と心の中では思ってたりして、もちろん絵に起こす以上２Ｄ３Ｄのみなさんには細やかな設定は念頭に置いてもらわなきゃいけないわけでそこら辺のフォローはすごいなー助かるなーと思いつつも、ライター側に「この世界の主な動力は何？」とか尋ねられて一瞬返答に詰まることがある。少し考えれば答えは出る、が、そこら辺は聞かれなければブラックボックスのままなんとなく進んで行きかねないところで、そういう意味では整合性は取るけれども設定がすごいとかいうのとはニュアンスが違うんじゃないかなあと思っている。ストーリー近辺のガイドラインしか設定が明確化されていないイメージ。少なくとも自分のシナリオはキャラでも設定でもなくストーリーがまずありきだったのだろうなあと思う。

でもそういうやり方だと、例えば「別視点で外伝ストーリーやりたいんだけどどこの組織どうなってんの？」と聞かれたときちょっと戸惑ったりする。ストーリー無しのゼロ起こしでは設定のどこから説明すれば良いのかサッパリわかんないのだ。そこら辺の意識共有がスムーズにできないと作品の続編や外伝の展開に難儀する。ファンディスクだってなか

なか出ない、というか事実あんまり出ていない、困る。
今回の凍京ＮＥＣＲＯはそこら辺ガラッとやり方を変えて、世界設定を作る所からスタートしてみた。キャラ設定はもちろん地図も作るし年表も書く。それらもまとめてクローズドのＷｉｋｉっぽいサイトを作ってみんなで閲覧共有する。設定考証の方に参加していただいたということもあるんだけれども、今までのシナリオのつくりとは違った立て付けになっている。
ので、今回のような風にオリジナルストーリーを作るのも格段に楽だったのだ。年表に合わせて整合性の取れる時間で事件を起こすことは容易だし、今まで使っていない設定の場所をメインに据えればそれだけで新しい切り口の凍京をお見せできる。小説化なんかはもちろんのこと、マンガだったりソシャゲだったりその他諸々なメディア展開もドンと来い！　なのだ。すごい！
そしてそれらの展開がこれからも続くかどうかは、みなさんの応援如何で決まります。オレたちも！　是非ぜひ！　続けていきたいです！　ので、これからも凍京ＮＥＣＲＯをどうぞ末永くよろしくお願いいたします。

下倉バイオ

凍京NECRO PREDAWN 白鳥女学院連続誘拐事件

2016年8月12日発行

原作：凍京NECRO<トウキョウ・ネクロ>

著者：下倉バイオ(Nitroplus)

イラスト： 大崎シンヤ (UNKNOWN GAMES)

彩色仕上げ：りんごキック(Nitroplus)
拓植新八(Nitroplus)
三杜シノヴ(Nitroplus)

背景：おーた幼女(Nitroplus Arts)

発行者：でじたろう

発行所：Nitroplus
www.nitroplus.co.jp

装丁：フジヤトモヤ
En

印刷・製本：三光リンクス

凍京NECRO<トウキョウ・ネクロ>特設サイト
nitroplus.co.jp/game/tokyonecro/

落丁本・乱丁本の交換につきましては、下記URLのお問い合わせフォームよりお問い合わせください。
https://support.nitroplus.co.jp/form/inquiry

本書の無断複製(コピー)は著作権法上の例外を除き、禁じられております。

©2016 Nitroplus
Printed in Japan


ようこそ、凍京へ

nitro+

Nitroplus
15th Anniversary Project

凍京NECRO
トウキョウ・ネクロ

一般版発売決定!

2016年9月30日(金)
ダウンロード版発売予定

原案:深見真 / 脚本:下倉バイオ / 原画:大崎シンヤ(UNKNOWN GAMES)
メカニックデザイン:石渡マコト(Nitroplus Arts)

■15歳以上推奨 ■死者再殺ADV ■日本語版Windows専用

nitroplus.co.jp

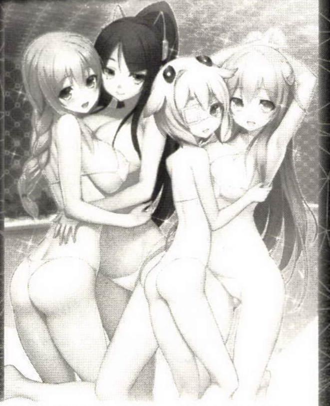
©2016 Nitroplus



凍京NECRO
トウキョウ・ネクロ ［ビジュアルファンブック TOKYO NECRO VISUAL FAN BOOK］

全国書店にて好評発売中！

イベントCGを大判掲載できる横型本と設定資料集の2冊組 200ページ超



ニトロプラス15周年記念作品の登場人物・イベントCGといったゲームグラフィックや、これまで描かれてきた販促用などのイラストに加え、メカ・武器・リビングデッドの設定もたっぷり掲載！　A4サイズを横長に使った仕様を活かしてイベントCGをより大きく載せ、それに通常の縦長仕様の設定資料集をプラスした2冊組でお届けします。大崎シンヤ(UNKNOWN GAMES)描き下ろしカバーイラストは早雲とエチカの名コンビで、B2ポスターにはイリア、蜜魅、霧里、コン・スーと、水着姿のヒロインが勢揃い!!さらにスタッフ&キャストコメントや下倉バイオ書き下ろしショートストーリーもお見逃しなく！

大崎シンヤ(UNKNOWN GAMES)描き下ろしB2ポスター付き!!

■A4判フルカラー 横型本176ページ+縦型本32ページ　■定価:3564円(本体3300円+税)

©2016 Nitroplus


あああ〜〜〜!!
劇画界の巨匠・叶精作が描く
衝撃的コミカライズ――
凍京NECRO
トウキョウ・ネクロ
漫画 叶精作 原作 ニトロプラス
コミッククリア 連載中!
www.comic-clear.jp

nitro+

TOKYO NECRO PREDAWN

©2016 Nitroplus